

2022年8月31日(水)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

14:00 ~ 15:50 | 第6会場 2号館1階11教室

生涯スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／協働システムの現状と課題から今後を考えるー“支えるスポーツ”が果たす役割ー

コーディネーター：後藤 光将（明治大学）

[生涯スポーツ-SA-1] スポーツボランティアの現状

*澁谷 茂樹¹ (1. 笹川スポーツ財団)

[生涯スポーツ-SA-2] スペシャルオリンピックのスポーツボランティアを通して考えるその役割と今後の課題

*田引 俊和¹ (1. 北陸学院大学)

[生涯スポーツ-SA-3] 共生社会とスポーツボランティア

*二宮 雅也¹ (1. 文教大学)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】 健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

14:00 ~ 15:50 | 第8会場 2号館2階21教室

健康福祉研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方ー「女」を生きることと健康・スポーツー

コーディネーター：高尾 将幸（東海大学） 指定討論者：山口 理恵子（城西大学）

[健康福祉-SA-1] 性差を考慮したコンディショニング管理の必要性

*須永 美歌子¹ (1. 日本体育大学)

[健康福祉-SA-2] 子どもの運動実施および体力・運動能力変化の性差

女兒の特徴を中心に

*中野 貴博¹ (1. 中京大学)

[健康福祉-SA-3] 学習指導要領と女性のスポーツ

*高橋 修一¹ (1. 日本女子体育大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

14:00 ~ 15:50 | 第1会場 3号館3階301教室

競技スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点 II ートップアスリートの大学からプロ・実業団への接続に着目してー

コーディネーター：谷釜 尋徳（東洋大学）、田原 陽介（青山学院大学）

[競技スポーツ-SA-1] パラアスリートの視点から

*水野 洋子¹ (1. 日本体育大学)

[競技スポーツ-SA-2] 女子バスケットボールの視点から

*池田 英治¹ (1. 筑波大学)

[競技スポーツ-SA-3] 男子サッカーの視点から

*須佐 徹太郎¹ (1. 阪南大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題A】グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

14:00 ~ 15:50 | 第2会場 3号館4階401教室

スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／スポーツを通じた開発支援と持続可能性

コーディネーター：河西 正博（同志社大学）、榎本 雅之（滋賀大学）

[スポーツ文化-SA-1] スポーツ国際開発学の定位と発展性

*山口 拓¹ (1. 筑波大学)

[スポーツ文化-SA-2] スポーツ開発を推進する途上国に対する日本からの視線

急激な経済開発を遂げた1990年代のタイ国の事例から

*佐川 哲也¹ (1. 金沢大学)

[スポーツ文化-SA-3] 「スポーツと開発」における授業研究アプローチの可能性

「ペルーに対する体育教師の能力開発支援」プロジェクトからみえたもの

*齊藤 一彦¹ (1. 広島大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

14:00 ~ 15:50 | 第3会場 3号館4階402教室

学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／共生社会の創造に向けた大学体育授業の可能性—多様性理解の観点から—

コーディネーター：今宿 裕（作新学院大学）、大林 太郎（筑波大学）

[学校保健体育-SA-1] 聴覚・視覚障害学生の体育授業

*向後 佑香¹、*天野 和彦¹ (1. 筑波技術大学)

[学校保健体育-SA-2] ジェンダー・セクシュアリティの視点を取り入れた大学体育授業の可能性

*野口 亜弥¹ (1. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

[学校保健体育-SA-3] 多文化理解につながる有形・無形文化財を活用した大学体育授業の可能性

*細谷 洋子¹ (1. 東洋大学)

2022年9月1日(木)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

10:30 ~ 12:20 | 第8会場 2号館2階21教室

健康福祉研究部会【課題B】 テーマ別シンポジウム／運動から認知へ、認知から運動へ

コーディネーター：木伏 紅緒（神戸大学）、細谷 洋子（東洋大学）

指定討論者：岩沼 聡一郎（帝京科学大学）

[健康福祉-SB-1] 運動・スポーツが盛んな地域に暮らすだけで認知機能が維持される！？

*辻 大士¹ (1. 筑波大学)

[健康福祉-SB-2] 認知症予防を目指した多因子介入の現状と課題

*古和 久朋¹ (1. 神戸大学大学院保健学研究科)

[健康福祉-SB-3] 心理的ストレス状況下での認知と運動

*田中 美吏¹ (1. 武庫川女子大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】 人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

10:30 ~ 12:20 | 第10会場 2号館4階45教室

スポーツ文化研究部会【課題B】 テーマ別シンポジウム／スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」はいかにして可能かー身体・組織・支援の観点からー

コーディネーター：加藤 えみか（京都産業大学）、高尾 尚平（日本体育大学）

指定討論者：渡 正（順天堂大学）

[スポーツ文化-SB-1] 身体論から捉える「多様性と調和」

*田中 愛¹ (1. 明星大学)

[スポーツ文化-SB-2] パラリンピックを通して考える共生社会

*河合 純一¹ (1. 公益財団法人日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会)

[スポーツ文化-SB-3] パラリンピック競技選手を対象とした体力測定プロトコルの検討

*袴田 智子¹ (1. 国立スポーツ科学センター)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

10:30 ~ 12:20 | 第1会場 3号館3階301教室

学校保健体育研究部会【課題B】 テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業とその学習内容を考えるー「豊かなスポーツライフ」の実現をキーワードにしてー

コーディネーター：岩田 英樹（金沢大学）、伊佐野 龍司（日本大学）

[学校保健体育-SB-1] 「これからの豊かなスポーツライフ」に求められること

*塩見 英樹¹ (1. スポーツ庁政策課)

[学校保健体育-SB-2] 「ともに」学び育つことの意義と豊かなスポーツライフ

*梅澤 秋久¹ (1. 横浜国立大学)

[学校保健体育-SB-3] 「自分の健康」だけでなく「みんなの健康へ」という視点

*今関 豊一¹ (1. 東京国際大学)

[学校保健体育-SB-4] 「学校と地域の連携」という視点からみた豊かなスポーツライフ

*清田 美紀¹ (1. 東広島市教育委員会)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

10:30～12:20 | 第2会場 3号館4階401教室

生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／子どもたちのWell-Beingとスポーツ政策・産業・そして遊びー

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

[生涯スポーツ-SB-1] 遊びの精神から見た子どものWell-Beingの実現とスポーツ

*松田 恵示¹ (1. 東京学芸大学)

[生涯スポーツ-SB-2] 子どものスポーツにおける格差とWell-Being

研究上の課題を中心に

*宮本 幸子¹ (1. 笹川スポーツ財団)

[生涯スポーツ-SB-3] 幼児期から発現する身体発達の二極化を防ぐ施策の提案

幼少期のWell-Beingの保障のために

*春日 晃章¹ (1. 岐阜大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

10:30～12:20 | 第3会場 3号館4階402教室

競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／競技スポーツの女性コーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

[競技スポーツ-SB-1] 女性コーチの活躍を支える組織文化をめざして

スポーツにおける女性を取り巻く社会的・文化的な背景

*來田 享子¹ (1. 中京大学)

[競技スポーツ-SB-2] 女性コーチ育成の現状

*三倉 茜¹ (1. 金沢医科大学)

[競技スポーツ-SB-3] 日本代表選手から日本代表監督へ

女子サッカーの例

*高倉 麻子¹ (1. 株式会社Bamboo8)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

17:00～18:50 | 第6会場 2号館1階11教室

生涯スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点（その2）ー国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けてー

コーディネーター：上野 耕平（香川大学）

[生涯スポーツ-SC-1] 障がい者のスポーツ参加の現状と問題把握

*太田 澄人¹ (1. 長野県障がい者福祉センターサンアップル)

[生涯スポーツ-SC-2] 元アスリートのスポーツ参加（キャリアサポート）の現状と問題把握

*筒井 香¹ (1. 株式会社BorderLeSS)

[生涯スポーツ-SC-3] みんなのスポーツ参加の現状と問題把握

ニュースポーツ・ユニバーサルスポーツに着目して

*仲野 隆士¹ (1. 仙台大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

17:00 ~ 18:50 | 第8会場 2号館2階21教室

スポーツ文化研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略(2)－身体文化の伝承・継承を科学する－

コーディネーター：久保田 浩史（東京学芸大学）、尾川 翔大（日本体育大学）
指定討論者：石井 隆憲（日本体育大学）

[スポーツ文化-SC-1] バイオメカニクス研究から考える身体文化の伝承・継承

*水村（久埜） 真由美¹ (1. お茶の水女子大学)

[スポーツ文化-SC-2] 身体文化としての〈わざ〉の伝承と動感出会い

*中村 剛¹ (1. 筑波大学)

[スポーツ文化-SC-3] 空手の指導実践から考える身体文化の伝承・継承

*清水 由佳¹ (1. 一般社団法人劉衛流龍鳳会)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいか
に貢献できるか

17:00 ~ 18:50 | 第5会場 2号館4階4E教室

学校保健体育研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／子どもの心身機能の現状から考えるこれからの保健体育とその科学的背景

コーディネーター：春日 晃章（岐阜大学）、松田 恵示（東京学芸大学）

[学校保健体育-SC-1] 心身機能とその科学的背景

*工藤 和俊¹ (1. 東京大学大学院総合文化研究科)

[学校保健体育-SC-2] 発育発達学の視点で考えるこれからの保健体育

*野井 真吾¹ (1. 日本体育大学)

[学校保健体育-SC-3] 戦後の体育科の変遷について

*近藤 智靖¹ (1. 日本体育大学)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防する
か

17:00 ~ 18:50 | 第1会場 3号館3階301教室

健康福祉研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／オンライン化で得られる健康、失う健康

コーディネーター：大槻 毅（流通経済大学）

[健康福祉-SC-1] 身体活動に対するCovid-19の影響とオンライン運動教室の実現可能性

*甲斐 裕子¹ (1. 公益財団法人明治安田厚生事業団体力医学研究所)

[健康福祉-SC-2] 高齢者のADLを維持することを狙いとする運動方法の模索

*竹島 伸生¹ (1. 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科)

[健康福祉-SC-3] 「体験」と「健康」の捉え方

*久保 正秋¹ (1. スポーツ＆レジャー研究所)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

17:00 ~ 18:50 | 第3会場 3号館4階402教室
競技スポーツ研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツにおける性差に応じたトレーニング
コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）

[競技スポーツ-SC-1] 月経周期が運動時生理反応に与える影響

*須永 美歌子¹ (1. 日本体育大学)

[競技スポーツ-SC-2] トップアスリートにおける性別特性が障害やパフォーマンスに及ぼす影響

*牧野 講平¹ (1. 森永製菓 in トレーニングラボ)

[競技スポーツ-SC-3] 女性アスリートにおけるトレーニングのマネジメントの実際

*川上 優子¹ (1. キャノンアスリートクラブ九州)

[競技スポーツ-SC-4] 性差を踏まえたジャンプトレーニング

*熊野 陽人¹ (1. 関西福祉大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

■ 2022年8月31日(水) 14:00 ~ 15:50 | Ⅲ 第6会場 2号館1階11教室

生涯スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／協働システムの現状と課題から今後を考えるー“支えるスポーツ”が果たす役割ー

コーディネーター：後藤 光将（明治大学）

本テーマ研究部会では、昨年度のテーマ別シンポジウムから、共生社会と生涯スポーツが共存するためにはスポーツのパラダイムチェンジが必要であることが共有された。このパラダイムチェンジにはスポーツの見方を変える、広げる必要があり、「する」だけでなく「みる」、「支える」という視点からも共生社会と協働システムを考えることが重要である。そこで今回は、「スポーツボランティア」という存在に着目する。スポーツボランティアは、「支えるスポーツ」の象徴的な存在であり、共生社会において生涯スポーツがどのように位置づくのかという文脈において、スポーツボランティアが果たす機能は、共同システムの中核を担うと考えている。そこでスポーツボランティアの役割や現状、課題について協議することとした。

このような趣旨を踏まえ、「スポーツボランティアの現場について」笹川スポーツ財団の澁谷茂樹氏からお話をいただく。次に、北陸学院大学の田引俊和氏から「スペシャルオリンピックスのスポーツボランティアを通して考えるその役割と今後の課題」についてお話をいただく。最後に、文教大学の二宮雅也氏から、「共生社会とスポーツボランティア」と題しお話をいただく。

発表を踏まえ、共生社会実現に向けた、協働システム構築に、スポーツボランティアを例とした「支えるスポーツ」がどのような役割を果たす、または担うべきであるのかについて意見交換し、今後の政策や法律上、具体的にどのような課題があるのかについて討議を深めてゆく。

[生涯スポーツ-SA-1] スポーツボランティアの現状

*澁谷 茂樹¹ (1. 笹川スポーツ財団)

[生涯スポーツ-SA-2] スペシャルオリンピックスのスポーツボランティアを通して考えるその役割と今後の課題

*田引 俊和¹ (1. 北陸学院大学)

[生涯スポーツ-SA-3] 共生社会とスポーツボランティア

*二宮 雅也¹ (1. 文教大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／協働システムの現状と課題から今後を考える ― “支えるスポーツ” が果たす役割―

コーディネーター：後藤 光将（明治大学）

2022年8月31日(水) 14:00 ～ 15:50 第6会場 (2号館1階11教室)

本テーマ研究部会では、昨年度のテーマ別シンポジウムから、共生社会と生涯スポーツが共存するためにはスポーツのパラダイムチェンジが必要であることが共有された。このパラダイムチェンジにはスポーツの見方を変える、広げる必要があり、「する」だけでなく「みる」、「支える」という視点からも共生社会と協働システムを考えることが重要である。そこで今回は、「スポーツボランティア」という存在に着目する。スポーツボランティアは、「支えるスポーツ」の象徴的な存在であり、共生社会において生涯スポーツがどのように位置づけるのかという文脈において、スポーツボランティアが果たす機能は、共同システムの中核を担うと考えている。そこでスポーツボランティアの役割や現状、課題について協議することとした。

このような趣旨を踏まえ、「スポーツボランティアの現場について」笹川スポーツ財団の澁谷茂樹氏からお話をいただく。次に、北陸学院大学の田引俊和氏から「スペシャルオリンピックスのスポーツボランティアを通して考えるその役割と今後の課題」についてお話をいただく。最後に、文教大学の二宮雅也氏から、「共生社会とスポーツボランティア」と題しお話をいただく。

発表を踏まえ、共生社会実現に向けた、協働システム構築に、スポーツボランティアを例とした「支えるスポーツ」がどのような役割を果たす、または担うべきであるのかについて意見交換し、今後の政策や法律上、具体的にどのような課題があるのかについて討議を深めてゆく。

[生涯スポーツ-SA-1]スポーツボランティアの現状

*澁谷 茂樹¹ (1. 笹川スポーツ財団)

<演者略歴>

笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 シニア政策ディレクター

日本スポーツボランティアネットワーク 事務局長

スポーツを「する」「みる」活動を成立させる上で不可欠なスポーツボランティアは、地域におけるスポーツの指導や大小さまざまな規模の大会運営、スポーツ活動の基盤となる競技団体、地域のクラブ・チームの運営など、その活動内容は多岐にわたる。しかしながら、「スポーツボランティア」という言葉に多くの人々がもつイメージは、国際的・全国的スポーツイベントやプロスポーツ興行で一般公募されるイベントボランティアに限定されている。近年、ある程度の規模のスポーツイベントでは、一般公募によるボランティアが大会の運営に重要な役割を果たすようになってきた。また、そこで活動するボランティアの多くが、活動そのものや活動を通じて得られる人とのつながりに強いモチベーションを抱き、多くのイベントに積極的に参加し、活動の質を高める好循環を生み出している。本発表では、わが国のスポーツボランティアを概観するとともに、イベントボランティアの好事例の紹介・分析を通じて、広くスポーツをささえる現場が抱える課題解決に向けた議論を喚起したい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／協働システムの現状と課題から今後を考える ― “支えるスポーツ” が果たす役割―

コーディネーター：後藤 光将（明治大学）

2022年8月31日(水) 14:00 ～ 15:50 第6会場 (2号館1階11教室)

本テーマ研究部会では、昨年度のテーマ別シンポジウムから、共生社会と生涯スポーツが共存するためにはスポーツのパラダイムチェンジが必要であることが共有された。このパラダイムチェンジにはスポーツの見方を変える、広げる必要があり、「する」だけでなく「みる」、「支える」という視点からも共生社会と協働システムを考えることが重要である。そこで今回は、「スポーツボランティア」という存在に着目する。スポーツボランティアは、「支えるスポーツ」の象徴的な存在であり、共生社会において生涯スポーツがどのように位置づけるのかという文脈において、スポーツボランティアが果たす機能は、共同システムの中核を担うと考えている。そこでスポーツボランティアの役割や現状、課題について協議することとした。

このような趣旨を踏まえ、「スポーツボランティアの現場について」笹川スポーツ財団の澁谷茂樹氏からお話をいただく。次に、北陸学院大学の田引俊和氏から「スペシャルオリンピックスのスポーツボランティアを通して考えるその役割と今後の課題」についてお話をいただく。最後に、文教大学の二宮雅也氏から、「共生社会とスポーツボランティア」と題しお話をいただく。

発表を踏まえ、共生社会実現に向けた、協働システム構築に、スポーツボランティアを例とした「支えるスポーツ」がどのような役割を果たす、または担うべきであるのかについて意見交換し、今後の政策や法律上、具体的にどのような課題があるのかについて討議を深めてゆく。

[生涯スポーツ-SA-2]スペシャルオリンピックスのスポーツボランティアを通して考えるその役割と今後の課題

*田引 俊和¹ (1. 北陸学院大学)

<演者略歴>

知的障害者スポーツ組織「スペシャルオリンピックス」を中心に、長年、スポーツボランティアとして障害のある人たちのスポーツに携わる。立命館大学大学院社会学研究科修了（社会学博士）、社会福祉士、日本パラスポーツ協会(JPSA)上級障がい者スポーツ指導員。

「スペシャルオリンピックス」は、47都道府県に活動拠点を設け、全国で8千人（2019年末時点）を超える知的障害のある会員の日常的、継続的なスポーツを支援している。多くの部分を、理念を共有する企業・団体等の協賛、および全国の約1万人（同時点）のスポーツボランティアが支え、日々のスポーツの協働や生涯スポーツイベントの開催、ボランティア研修などを行いながら知的障害者スポーツの裾野を広げることを目指してきた。

活動を始めて25年が経ったいま、活動範囲や知的障害のある会員が拡大し、求められる内容も多様化している。新たな発見もあり、従来からのボランティア募集や養成だけでは対応できなくなっている部分もみられるようになってきた。今後、木を繁らせ、山を高める（日本パラスポーツ協会）といったことも含め、活動を持続可能なものにしていくためにはその役割、位置付けを明確にしていく必要がある。スポーツボランティアは何を支えるのか、また支えようとしている生涯スポーツとはどのようなもので、どう捉えればいいのか、一つの障害者スポーツ組織の動向、課題とともに、あらためて考える。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／協働システムの現状と課題から今後を考える ― “支えるスポーツ” が果たす役割―

コーディネーター：後藤 光将（明治大学）

2022年8月31日(水) 14:00 ～ 15:50 第6会場 (2号館1階11教室)

本テーマ研究部会では、昨年度のテーマ別シンポジウムから、共生社会と生涯スポーツが共存するためにはスポーツのパラダイムチェンジが必要であることが共有された。このパラダイムチェンジにはスポーツの見方を変える、広げる必要があり、「する」だけでなく「みる」、「支える」という視点からも共生社会と協働システムを考えることが重要である。そこで今回は、「スポーツボランティア」という存在に着目する。スポーツボランティアは、「支えるスポーツ」の象徴的な存在であり、共生社会において生涯スポーツがどのように位置づけるのかという文脈において、スポーツボランティアが果たす機能は、共同システムの中核を担うと考えている。そこでスポーツボランティアの役割や現状、課題について協議することとした。

このような趣旨を踏まえ、「スポーツボランティアの現場について」笹川スポーツ財団の澁谷茂樹氏からお話をいただく。次に、北陸学院大学の田引俊和氏から「スペシャルオリンピックのスポーツボランティアを通して考えるその役割と今後の課題」についてお話をいただく。最後に、文教大学の二宮雅也氏から、「共生社会とスポーツボランティア」と題しお話をいただく。

発表を踏まえ、共生社会実現に向けた、協働システム構築に、スポーツボランティアを例とした「支えるスポーツ」がどのような役割を果たす、または担うべきであるのかについて意見交換し、今後の政策や法律上、具体的にどのような課題があるのかについて討議を深めてゆく。

[生涯スポーツ-SA-3]共生社会とスポーツボランティア

*二宮 雅也¹ (1. 文教大学)

<演者略歴>

文教大学人間科学部教授

日本財団ボランティアセンター理事

日本スポーツボランティアネットワーク理事

数多くのスポーツボランティアの募集が行われている今日であるが、そこにはボランティア参加を困難にしている障壁が存在していることがある。発表者は、識者として東京2020大会のボランティア運営サポート、並びに大会ボランティアとして実際の活動に携わったが、実際に大会組織委員会や自治体のボランティアサポートは十分だったとは言えない。それは、スポーツボランティアというキーワードがイメージさせる参加者像が固定化されていることに起因する問題であり、また、ボランティアという活動のイメージにも連動するものである。つまり、スポーツボランティアにおける「general」に関する課題であると捉えている。本発表では、スポーツボランティア活動の事例報告を通じてその問題にアプローチしたい。尚、この発表テーマにおける共生社会（Cohesive Society）とは、「必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった方が自分の意思で参加できる社会」を意味するが、逆説的には「参加しないことも選択できる状況」として捉えている。Volunteerの本質的な意味である「自由意志」を尊重しながら、スポーツボランティアの現場から広がる共生社会の可能性についてディスカッションを深めたい。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】 健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

■ 2022年8月31日(水) 14:00 ~ 15:50 | Ⅲ 第8会場 2号館2階21教室

健康福祉研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方ー「女」を生きることと健康・スポーツー

コーディネーター：高尾 将幸（東海大学） 指定討論者：山口 理恵子（城西大学）

これまで健康や体力を語る際の中心であった「青年・壮年期の健常男性」に対し、多様なライフスタイルやライフコースを念頭において、これからの健康増進や体力向上のあり方を考えることが狙いである。本課題では“「女」を生きることと健康・スポーツ”というサブタイトルのもと、ジェンダー／セックスとしての女性のスポーツ経験や健康増進のあり方に焦点をあてる。この点について、本年度は特に学校教育や部活動の現状とその課題を明確化することに照準する。シンポジストには保健体育科教育、発育発達、運動生理学の専門家をお招きし、それぞれの視点から本課題への考察を示していただく。また、ジェンダー研究に精通している専門家を指定討論者としてお招きし、女性をめぐる体育・スポーツ・健康科学による複数的な知のあり方をどのように考え、社会に向けて提示していくべきなのかについて領域横断的に議論を展開していく。学問的高度化は、ともすればそれぞれの学問領域の内閉化を推し進めてしまうが、それを避けるためにも「女」として生きる経験に寄り添いながら、健康増進や体力向上のこれからのあり方について考察を深めていきたい。

[健康福祉-SA-1] 性差を考慮したコンディション管理の必要性

*須永 美歌子¹ (1. 日本体育大学)

[健康福祉-SA-2] 子どもの運動実施および体力・運動能力変化の性差

女兒の特徴を中心に

*中野 貴博¹ (1. 中京大学)

[健康福祉-SA-3] 学習指導要領と女性のスポーツ

*高橋 修一¹ (1. 日本女子体育大学)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題A】 健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方―「女」を生きることと健康・スポーツ―

コーディネーター：高尾 将幸（東海大学） 指定討論者：山口 理恵子（城西大学）

2022年8月31日(水) 14:00 ～ 15:50 第8会場 (2号館2階21教室)

これまで健康や体力を語る際の中心であった「青年・壮年期の健常男性」に対し、多様なライフスタイルやライフコースを念頭において、これからの健康増進や体力向上のあり方を考えることが狙いである。本課題では“「女」を生きることと健康・スポーツ”というサブタイトルのもと、ジェンダー／セックスとしての女性のスポーツ経験や健康増進のあり方に焦点をあてる。この点について、本年度は特に学校教育や部活動の現状とその課題を明確化することに照準する。シンポジストには保健体育科教育、発育発達、運動生理学の専門家をお招きし、それぞれの視点から本課題への考察を示していただく。また、ジェンダー研究に精通している専門家を指定討論者としてお招きし、女性をめぐる体育・スポーツ・健康科学による複数的な知のあり方をどのように考え、社会に向けて提示していくべきなのかについて領域横断的に議論を展開していく。学問的高度化は、ともすればそれぞれの学問領域の内閉化を推し進めてしまうが、それを避けるためにも「女」として生きる経験に寄り添いながら、健康増進や体力向上のこれからのあり方について考察を深めていきたい。

[健康福祉-SA-1]性差を考慮したコンディション管理の必要性

*須永 美歌子¹ (1. 日本体育大学)

<演者略歴>

博士（医学）。日本オリンピック委員会強化スタッフ（医・科学スタッフ）、日本陸上競技連盟科学委員、日本体力医学会理事、日本トレーニング科学会会長。運動時生理反応の男女差や月経周期の影響を考慮し、女性のための効率的なコンディショニング法やトレーニングプログラムの開発を目指し研究に取り組む。

成人女性の生物学的特徴として、月経周期を有することが挙げられる。月経周期とは、月経開始から次の月経の前日までの期間と定義され、約一ヶ月の周期で性ホルモン濃度が大きく変化する。このような性ホルモンの変動は、コンディション（こころやからだの調子）に影響を与えることが知られている。さらに、女性は妊娠・出産や閉経などライフステージによっても性ホルモン濃度は大きく変化し、心身の健康状態に影響を及ぼす。したがって、女性の場合には、生涯を通じて性ホルモンの影響を考慮した体調管理が必要となる。しかしながら、それにかかわる情報は十分に普及していないというのが現状である。また、健康の維持増進のためには子どもの時期からの継続的なスポーツ活動が有効であるが、月経随伴症状を理由にスポーツ参加に消極的になってしまうケースもある。今後は、学校教育や部活動を通して、女性のヘルスリテラシーを高める機会を作ることが必要であると考えられる。本セッションでは、主に月経周期に伴うコンディションの変化に着目し、健康問題やスポーツ活動への影響について検討したい。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題A】 健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方ー「女」を生きることと健康・スポーツー

コーディネーター：高尾 将幸（東海大学） 指定討論者：山口 理恵子（城西大学）

2022年8月31日(水) 14:00 ～ 15:50 第8会場 (2号館2階21教室)

これまで健康や体力を語る際の中心であった「青年・壮年期の健常男性」に対し、多様なライフスタイルやライフコースを念頭において、これからの健康増進や体力向上のあり方を考えることが狙いである。本課題では“「女」を生きることと健康・スポーツ”というサブタイトルのもと、ジェンダー／セックスとしての女性のスポーツ経験や健康増進のあり方に焦点をあてる。この点について、本年度は特に学校教育や部活動の現状とその課題を明確化することに照準する。シンポジストには保健体育科教育、発育発達、運動生理学の専門家をお招きし、それぞれの視点から本課題への考察を示していただく。また、ジェンダー研究に精通している専門家を指定討論者としてお招きし、女性をめぐる体育・スポーツ・健康科学による複数的な知のあり方をどのように考え、社会に向けて提示していくべきなのかについて領域横断的に議論を展開していく。学問的高度化は、ともすればそれぞれの学問領域の内閉化を推し進めてしまうが、それを避けるためにも「女」として生きる経験に寄り添いながら、健康増進や体力向上のこれからのあり方について考察を深めていきたい。

[健康福祉-SA-2]子どもの運動実施および体力・運動能力変化の性差

女兒の特徴を中心に

*中野 貴博¹ (1. 中京大学)

<演者略歴>

筑波大学体育科学研究科修了。博士（体育科学）。名古屋学院大学教授を経て2021年4月より中京大学スポーツ科学部教授。2010~11:Indiana University 在外研究員。現在は、スポーツ庁の体力、運動能力、運動習慣等調査有識者委員会委員長などを務め、子どもの運動促進や体力向上、運動の社会、教育的効果などについて研究。

子ども期は、その後の運動への嗜好性を決定づける可能性のある重要な時期である。特に、女兒では小学校中高学年頃から、運動の好き・嫌いや得意・苦手の意識が男児以上に明確化し、嫌いあるいは、苦手と回答する児童が増加する傾向にある。そのため、この時期の運動実施については多くの配慮が必要であると考えられる。また、近年では体力低下の傾向やそれに強く関連するスクリーンタイムの増加傾向なども男女差が見られることが我々の研究データからわかってきている。さらに、女兒の保護者においては、男児の保護者に比べて、運動やスポーツに期待する度合いが低下することも、我々の調査からわかっている。本発表では、運動の嗜好性に関する性差、体力変化の性差、運動に対する期待の違いなど、ここで記した事項を中心に、実際の研究データを用いて紹介する。さらに、小学校における運動部活動参加の実態や、その関連要因に関しても部活動改革に関する調査データから検討を加える。以上を通して、子ども期の運動実施に関して、性別で配慮すべき事柄を発育発達の観点も交えながら議論したいと思う。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題A】 健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方ー「女」を生きることと健康・スポーツー

コーディネーター：高尾 将幸（東海大学） 指定討論者：山口 理恵子（城西大学）

2022年8月31日(水) 14:00 ～ 15:50 第8会場 (2号館2階21教室)

これまで健康や体力を語る際の中心であった「青年・壮年期の健常男性」に対し、多様なライフスタイルやライフコースを念頭において、これからの健康増進や体力向上のあり方を考えることが狙いである。本課題では“「女」を生きることと健康・スポーツ”というサブタイトルのもと、ジェンダー／セックスとしての女性のスポーツ経験や健康増進のあり方に焦点をあてる。この点について、本年度は特に学校教育や部活動の現状とその課題を明確化することに照準する。シンポジストには保健体育科教育、発育発達、運動生理学の専門家をお招きし、それぞれの視点から本課題への考察を示していただく。また、ジェンダー研究に精通している専門家を指定討論者としてお招きし、女性をめぐる体育・スポーツ・健康科学による複数的な知のあり方をどのように考え、社会に向けて提示していくべきなのかについて領域横断的に議論を展開していく。学問的高度化は、ともすればそれぞれの学問領域の内閉化を推し進めてしまうが、それを避けるためにも「女」として生きる経験に寄り添いながら、健康増進や体力向上のこれからのあり方について考察を深めていきたい。

[健康福祉-SA-3]学習指導要領と女性のスポーツ

*高橋 修一¹ (1. 日本女子体育大学)

<演者略歴>

1988年4月から2008年3月まで山形県公立高等学校教諭、2008年4月から2014年3月まで山形県教育委員会指導主事、2014年4月から2019年3月まで文部科学省国立教育政策研究所教育課程調査官兼スポーツ庁政策課教科調査官、2019年4月から日本女子体育大学体育学部教授。2017・2018年改訂学習指導要領の編集を務める。

2017・2018年改訂の学習指導要領の体育科・保健体育科の目標には「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現（継続）する」旨の記載がある。また、同解説では、「豊かなスポーツライフを継続していくためには、運動の技能を高めていくことのみならず、体力や技能の程度、性別や障害の有無、目的等の違いを越えて、運動やスポーツの多様な楽しみ方を社会で実践することが求められる。そのため、新たに共生の視点を踏まえて指導内容を示すこととした」と示されている。他方、体育の授業を除く1週間の総運動時間が0分の児童生徒の割合が、小学校男子4.0%、小学校女子5.0%、中学校男子5.6%、中学校女子11.5%、高等学校男子14.9%、高等学校女子32.9%という調査結果もある。

本発表では、学習指導要領の趣旨や内容及び歴史的な経緯等について説明するとともに、学校における体育授業の現状等について紹介し、女性の運動やスポーツについて考えてみたい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

■ 2022年8月31日(水) 14:00 ~ 15:50 | Ⅲ 第1会場 3号館3階301教室

競技スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点Ⅱ —トップアスリートの大学からプロ・実業団への接続に着目して—

コーディネーター：谷釜 尋徳（東洋大学）、田原 陽介（青山学院大学）

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点を取り上げる。2年目となる今回は、トップアスリートが大学での競技生活を経て、さらにプロ・実業団の世界へ進んで飛躍を遂げていく際の一つの課題として、両者の「接続」の側面に着目することとした。①パラアスリート、②女子バスケットボール、③男子サッカーという視点を設定し、各々の指導現場を熟知する3名のシンポジストが登壇する。卒業後も高いレベルで競技を継続するアスリートにとって、「大学」と「プロ・実業団」は、それぞれ個別に完結し得るものではなく、両者の「接続」は大きな意味を持つ。また、競技によっては、大学在学中から「プロ・実業団」の世界にチャレンジするケースも少なくない。トップアスリートが大学からプロ・実業団へとスムーズに移行するためには、大学ではどのような点を考慮した指導が必要なのか、大学生としてのアスリートはどのような意識を持てばよいのか、アスリートが所属する大学にはどのような環境整備が求められているのか、等々、競技や専門領域の枠組みを超えた積極的な議論から、課題解決の糸口を見出したい。

[競技スポーツ-SA-1] パラアスリートの視点から

*水野 洋子¹ (1. 日本体育大学)

[競技スポーツ-SA-2] 女子バスケットボールの視点から

*池田 英治¹ (1. 筑波大学)

[競技スポーツ-SA-3] 男子サッカーの視点から

*須佐 徹太郎¹ (1. 阪南大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点 II トップアスリートの大学からプロ・実業団への接続に着目してー

コーディネーター：谷釜 尋徳（東洋大学）、田原 陽介（青山学院大学）

2022年8月31日(水) 14:00 ～ 15:50 第1会場 (3号館3階301教室)

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点を取り上げる。2年目となる今回は、トップアスリートが大学での競技生活を経て、さらにプロ・実業団の世界へ進んで飛躍を遂げていく際の一つの課題として、両者の「接続」の側面に着目することとした。①パラアスリート、②女子バスケットボール、③男子サッカーという視点を設定し、各々の指導現場を熟知する3名のシンポジストが登壇する。卒業後も高いレベルで競技を継続するアスリートにとって、「大学」と「プロ・実業団」は、それぞれ個別に完結し得るものではなく、両者の「接続」は大きな意味を持つ。また、競技によっては、大学在学中から「プロ・実業団」の世界にチャレンジするケースも少なくない。トップアスリートが大学からプロ・実業団へとスムーズに移行するためには、大学ではどのような点を考慮した指導が必要なのか、大学生としてのアスリートはどのような意識を持てばよいのか、アスリートが所属する大学にはどのような環境整備が求められているのか、等々、競技や専門領域の枠組みを超えた積極的な議論から、課題解決の糸口を見出したい。

[競技スポーツ-SA-1]パラアスリートの視点から

*水野 洋子¹ (1. 日本体育大学)

<演者略歴>

2020年同学教育学研究科実践教科教育学専攻博士後期課程満期退学。2015年日体大陸上競技部パラアスリートブロック監督に就任。陸上競技部で指導したパラアスリートが、2016年リオデジャネイロパラリンピックで1名3位入賞、東京パラリンピックで2名入賞。現在も陸上パラアスリートの育成・強化の第一線で活躍している。

現在日体大では、2017年にアスレチックデパートメント（以下AD）が創設され、強化、キャリア、人事育成、マーケティングの4つに同時に取り組むことで「好循環を創出し、継続的な強化を図り、トップアスリートを輩出し続ける」ことを目的として様々な取り組みが行われている。しかし、トップアスリートの競技継続としたキャリア支援の取り組みについてはほとんど行われていない。日体大の場合は、ADだけではなく学生支援センターの学修・キャリア支援部門の事業も行われているが、一般の学生向けになり、競技を継続したいトップアスリートは個人的に「アスナビ」などで就職先をさがすか、部活動単位で就職先を探すのが現状である。

2015年に陸上部パラアスリートブロックが発足し、2016年に日本財団からパラアスリートに向けた奨学金が設置され、スポーツを行う障がい者学生が急増した。そして4年後の2020年には、その第1期生が卒業を迎えた。その時からの実状について発表し、今後デュアルキャリア支援にどのように取り組んでいくか、学生であるアスリートはどのような意識を持つべきか、就職先となる企業等との連携をどう構築するかについて、皆さんと問題を共有したい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点 II ー トップアスリートの大学からプロ・実業団への接続に着目してー

コーディネーター：谷釜 尋徳（東洋大学）、田原 陽介（青山学院大学）

2022年8月31日(水) 14:00 ～ 15:50 第1会場 (3号館3階301教室)

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点を取り上げる。2年目となる今回は、トップアスリートが大学での競技生活を経て、さらにプロ・実業団の世界へ進んで飛躍を遂げていく際の一つの課題として、両者の「接続」の側面に着目することとした。①パラアスリート、②女子バスケットボール、③男子サッカーという視点を設定し、各々の指導現場を熟知する3名のシンポジストが登壇する。卒業後も高いレベルで競技を継続するアスリートにとって、「大学」と「プロ・実業団」は、それぞれ個別に完結し得るものではなく、両者の「接続」は大きな意味を持つ。また、競技によっては、大学在学中から「プロ・実業団」の世界にチャレンジするケースも少なくない。トップアスリートが大学からプロ・実業団へとスムーズに移行するためには、大学ではどのような点を考慮した指導が必要なのか、大学生としてのアスリートはどのような意識を持てばよいのか、アスリートが所属する大学にはどのような環境整備が求められているのか、等々、競技や専門領域の枠組みを超えた積極的な議論から、課題解決の糸口を見出したい。

[競技スポーツ-SA-2]女子バスケットボールの視点から

*池田 英治¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

筑波大学体育系助教（女子バスケットボール部コーチ）。

山形大学地域教育文化学部准教授（女子バスケットボール部監督）を経て、2021年より現職。

わが国の女子バスケットボールにおいて、大学生トップアスリートが卒業後に目指す「プロ・実業団」の世界には、トップリーグである「WJBL」、あるいは、日本社会人バスケットボール連盟の主催する「地域リーグ」、が挙げられる。前者は、長らく「高卒」選手の割合が大きいことが特徴的であったものの、近年では、「大卒」選手の割合が徐々に大きくなっている傾向にある。一方で、後者は、従前より「大卒」選手の割合が高いことが特徴的である。このように、WJBLの第1回大会が開催された約20年前と比べ、全体として、大学を経て高いレベルで競技を継続するというキャリア形成を行う選手が増えてきていることは、「大学からプロ・実業団」という「接続」が、女子バスケットボール選手のキャリア形成に幾ばくかの好ましい役割を果たしていることの証左だと思われる。本シンポジウムでは、私自身が指導した学生の中で「プロ・実業団」の世界に身を投じた選手を事例として取り上げ、当該の「接続」において留意すべき事項を紹介（提案）するとともに、皆さまとの議論をとおして、解決すべき問題点・課題について考察したい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点 II ー トップアスリートの大学からプロ・実業団への接続に着目してー

コーディネーター：谷釜 尋徳（東洋大学）、田原 陽介（青山学院大学）

2022年8月31日(水) 14:00 ～ 15:50 第1会場 (3号館3階301教室)

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点を取り上げる。2年目となる今回は、トップアスリートが大学での競技生活を経て、さらにプロ・実業団の世界へ進んで飛躍を遂げていく際の一つの課題として、両者の「接続」の側面に着目することとした。①パラアスリート、②女子バスケットボール、③男子サッカーという視点を設定し、各々の指導現場を熟知する3名のシンポジストが登壇する。卒業後も高いレベルで競技を継続するアスリートにとって、「大学」と「プロ・実業団」は、それぞれ個別に完結し得るものではなく、両者の「接続」は大きな意味を持つ。また、競技によっては、大学在学中から「プロ・実業団」の世界にチャレンジするケースも少なくない。トップアスリートが大学からプロ・実業団へとスムーズに移行するためには、大学ではどのような点を考慮した指導が必要なのか、大学生としてのアスリートはどのような意識を持てばよいのか、アスリートが所属する大学にはどのような環境整備が求められているのか、等々、競技や専門領域の枠組みを超えた積極的な議論から、課題解決の糸口を見出したい。

[競技スポーツ-SA-3]男子サッカーの視点から

*須佐 徹太郎¹ (1. 阪南大学)

<演者略歴>

1986年筑波大学大学院体育科学研究科満期退学

1987年阪南大学商学部助教授、現流通学部教授、阪南大学サッカー部監督(2021年まで)、

1990年代関西学生サッカー連盟理事長・技術委員長、1991年全日本サッカー連盟理事、現技術委員

20年以上長期低迷していた日本サッカーは、競技人口の拡大をベースとした地盤形成を背景に93年Jリーグ発足を実現させた。02W杯誘致と結びついてJFAは強化諸策に着手。しかし皮肉にも日本サッカーの強化の連環から大学サッカーが外れることに。

その隘路の克服に、99年度全日本大学サッカー連盟は5ヵ年計画を策定。JFAとの連携強化(特別強化指定選手制度・トレーニング費用の制度化等)、各地域リーグ戦の通年制化と試合数の増加、全国大会の改革によるレベルアップと地域リーグの活性化の企図、二軍選手へのIリーグの創設、ユニバーシアードを基軸とした大学選抜の強化等に着手、悉く実現。結果、Jリーグの新加入選手のほぼ過半数を大卒選手が占め、即戦力率・フル代表選出数の増加に結実。

問題点として、トレーニング環境・試合環境の整備、生活基盤の確立、教育体制づくり、一般学生との結びつき強化が挙げられる。入場料収入や放映権料に期待できない現状で、自立した資金調達が鍵ではないか。FIFAのトレーニング補償金・連帯貢献金にほど遠いJリーグのトレーニング費用の大幅増額の問題。同時に大学と地域との連携強化に根差した大学スポーツ事業の自立化にあると考える。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題A】グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

■ 2022年8月31日(水) 14:00 ~ 15:50 | 第2会場 3号館4階401教室

スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／スポーツを通じた開発支援と持続可能性

コーディネーター：河西 正博（同志社大学）、榎本 雅之（滋賀大学）

スポーツと「開発」の関係性は非常に多様であり、スポーツの開発（スポーツ振興、スポーツに関わる諸課題の解決）、スポーツと開発（スポーツが個人や集団、社会に与える影響の検証）等、様々な視点で論じられている。グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるかという点に関して、本シンポジウムでは「スポーツを通じた開発」について議論を展開していく。「スポーツを通じた開発」とは、国際規模の社会課題の解決にスポーツの力を活用するものであり、ここでの社会課題とは特に開発途上国において深刻な貧困や紛争、教育、ジェンダー、感染症等の課題を指すものである。現在、国際連合やJICA、NGOや企業等、様々な組織によってスポーツを通じた開発支援が行われているが、支援の現場ではどのような課題が生じているのだろうか。

以上の問題関心のもと、本シンポジウムではスポーツを通じた開発支援の動向を概説した上で、支援先において体育・スポーツがどのように享受されているのか、それにともなう身体文化の変容過程、体育科教育に関わる具体的な支援事例を報告し、持続可能な開発支援のあり方ならびに、そこでの体育やスポーツの意義について議論を深めていく。

[スポーツ文化-SA-1] スポーツ国際開発学の定位と発展性

*山口 拓¹ (1. 筑波大学)

[スポーツ文化-SA-2] スポーツ開発を推進する途上国に対する日本からの視線

急激な経済開発を遂げた1990年代のタイ国の事例から

*佐川 哲也¹ (1. 金沢大学)

[スポーツ文化-SA-3] 「スポーツと開発」における授業研究アプローチの可能性

「ペルーに対する体育教師の能力開発支援」プロジェクトからみえたもの

*齊藤 一彦¹ (1. 広島大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／スポーツを通じた開発支援と持続可能性

コーディネーター：河西 正博（同志社大学）、榎本 雅之（滋賀大学）

2022年8月31日(水) 14:00 ～ 15:50 第2会場 (3号館4階401教室)

スポーツと「開発」の関係性は非常に多様であり、スポーツの開発（スポーツ振興、スポーツに関わる諸課題の解決）、スポーツと開発（スポーツが個人や集団、社会に与える影響の検証）等、様々な視点で論じられている。グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるかという点に関して、本シンポジウムでは「スポーツを通じた開発」について議論を展開していく。「スポーツを通じた開発」とは、国際規模の社会課題の解決にスポーツの力を活用するものであり、ここでの社会課題とは特に開発途上国において深刻な貧困や紛争、教育、ジェンダー、感染症等の課題を指すものである。現在、国際連合やJICA、NGOや企業等、様々な組織によってスポーツを通じた開発支援が行われているが、支援の現場ではどのような課題が生じているのだろうか。

以上の問題関心のもと、本シンポジウムではスポーツを通じた開発支援の動向を概説した上で、支援先において体育・スポーツがどのように享受されているのか、それにともなう身体文化の変容過程、体育科教育に関わる具体的な支援事例を報告し、持続可能な開発支援のあり方ならびに、そこでの体育やスポーツの意義について議論を深めていく。

[スポーツ文化-SA-1]スポーツ国際開発学の定位と発展性

*山口 拓¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

筑波大学体育系助教。UNESCO IPL専門家。NGO理事・事務所長、JICAプロジェクトマネージャーなどを歴任しながらスポーツ国際開発の実践者として在外で15年以上勤務して現職。2016年にロイヤル・モニサラポン勳章大十字章を受勲。現在の主な研究テーマは「過去・現在・未来のスポーツが各開発課題に果たす役割」。

現今の社会では、世界で猛威を振るう COVID-19、無秩序な社会を象徴する終わりなき紛争、歯止めの利かない地球温暖化や自然災害の頻発など、社会的弱者はおろか一般市民の安全保障でさえも難しい状況に陥っている。そんな状況下において、個人の能力を高め、社会に潤いを与える等、時代に応じて重要な役割を担ってきたスポーツのソフトパワーは、さらなる進化を遂げ、「スポーツを通じた開発（IDS）」或いは「平和と開発のためのスポーツ（SDP）」等と呼称されるまでに至り、平和や開発などの領域で活用される中で成長の一途を辿っている。

しかし、実活動を軸に世界へ広まったこの現象は、活動内容が多様で汎用性が高く、各地の文脈に合わせた処方箋が講じられることから、研究対象になり辛く、学術分野から敬遠されていたように感じられる。しかし、そもそも総合科学領域にある開発学やスポーツ科学は、応用科学との親和性も高いことから、個別の状況に合わせた研究に向いており、多様な研究の可能性が秘められている。

今回の発表では、こうしたスポーツと開発をめぐる背景を解き明かしながら、参加者の皆さんの興味を高めつつ、後の議論の足掛かりとなる情報を提供したい。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／スポーツを通じた開発支援と持続可能性

コーディネーター：河西 正博（同志社大学）、榎本 雅之（滋賀大学）

2022年8月31日(水) 14:00 ～ 15:50 第2会場 (3号館4階401教室)

スポーツと「開発」の関係性は非常に多様であり、スポーツの開発（スポーツ振興、スポーツに関わる諸課題の解決）、スポーツと開発（スポーツが個人や集団、社会に与える影響の検証）等、様々な視点で論じられている。グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるかという点に関して、本シンポジウムでは「スポーツを通じた開発」について議論を展開していく。「スポーツを通じた開発」とは、国際規模の社会課題の解決にスポーツの力を活用するものであり、ここでの社会課題とは特に開発途上国において深刻な貧困や紛争、教育、ジェンダー、感染症等の課題を指すものである。現在、国際連合やJICA、NGOや企業等、様々な組織によってスポーツを通じた開発支援が行われているが、支援の現場ではどのような課題が生じているのだろうか。

以上の問題関心のもと、本シンポジウムではスポーツを通じた開発支援の動向を概説した上で、支援先において体育・スポーツがどのように享受されているのか、それにともなう身体文化の変容過程、体育科教育に関わる具体的な支援事例を報告し、持続可能な開発支援のあり方ならびに、そこでの体育やスポーツの意義について議論を深めていく。

[スポーツ文化-SA-2]スポーツ開発を推進する途上国に対する日本からの視線

急激な経済開発を遂げた1990年代のタイ国の事例から

*佐川 哲也¹ (1. 金沢大学)

<演者略歴>

金沢大学人間社会研究域人間科学系教授。大妻女子大学人間生活科学研究所助手、金沢大学教育学部助教授を経て現職。筑波大学大学院体育科学研究科単位取得満期退学、教育学修士。専門はスポーツ社会学、スポーツ人類学。1986年からタイ、ミャンマー、ネパールなどにおいて子ども調査に従事。

私が初めて東北タイ調査に参加した1986年頃のタイ国は発展の途上にあり、前近代と近代が入り交じり、首都バンコクと地方には明瞭な都鄙差が認められた。東北タイの純農村、地方都市、バンコク都、そして日本という近代化・都市化水準の異なる地域勾配を研究枠組みとして、子どもの発育、生活、遊び・スポーツの研究を開始した。

伝統的生活様式の残る純農村においてさえ新校舎に建て替えられ、教室にテレビやPCが導入された。学校対抗のスポーツ競技会が盛んに開催され、教育省体育局がスポーツスクールを設置し、タイ国におけるスポーツの地位が上昇した。途上国の中でいち早く経済発展を進めたタイでは、スポーツの普及と発展を急いでいるように見受けられた。その結果として、伝統菓子よりもスナック菓子を選ぶが如く、子どもたちは伝統遊びよりもスポーツを好むようになり、世代を越えて連綿と続いてきた伝統遊びを静かに消失させることになった。こうした国々に寄り添ってスポーツ開発を語るとき、「容易く伝統文化を消失させてよいのか」「世界共通となったスポーツだけに力を注ぐことでよいのか」と発信することが使命だと感じるようになっていた。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／スポーツを通じた開発支援と持続可能性

コーディネーター：河西 正博（同志社大学）、榎本 雅之（滋賀大学）

2022年8月31日(水) 14:00 ～ 15:50 第2会場 (3号館4階401教室)

スポーツと「開発」の関係性は非常に多様であり、スポーツの開発（スポーツ振興、スポーツに関わる諸課題の解決）、スポーツと開発（スポーツが個人や集団、社会に与える影響の検証）等、様々な視点で論じられている。グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるかという点に関して、本シンポジウムでは「スポーツを通じた開発」について議論を展開していく。「スポーツを通じた開発」とは、国際規模の社会課題の解決にスポーツの力を活用するものであり、ここでの社会課題とは特に開発途上国において深刻な貧困や紛争、教育、ジェンダー、感染症等の課題を指すものである。現在、国際連合やJICA、NGOや企業等、様々な組織によってスポーツを通じた開発支援が行われているが、支援の現場ではどのような課題が生じているのだろうか。

以上の問題関心のもと、本シンポジウムではスポーツを通じた開発支援の動向を概説した上で、支援先において体育・スポーツがどのように享受されているのか、それにともなう身体文化の変容過程、体育科教育に関わる具体的な支援事例を報告し、持続可能な開発支援のあり方ならびに、そこでの体育やスポーツの意義について議論を深めていく。

[スポーツ文化-SA-3]「スポーツと開発」における授業研究アプローチの可能性

「ペルーに対する体育教師の能力開発支援」プロジェクトからみえたもの

*齊藤 一彦¹ (1. 広島大学)

<演者略歴>

広島大学大学院人間社会科学研究科教授。青年海外協力隊（シリア）、JICA客員研究員、日本学術振興会特別研究員、徳山工業高等専門学校准教授、金沢大学准教授などを経て現職。広島大学大学院国際協力研究科修了、博士（教育学）。専門はスポーツ教育学、スポーツ国際開発学。

東京五輪開催を契機に、体育・スポーツ分野の国際貢献事業「スポーツ・フォー・トゥモロー（SFT）」が開始された。本事業は2014年に始まり、2021年度末まで行われ、100ヵ国以上を対象、1,000万人以上の裨益者を創出することを目標とし、2019年にその数値目標は達成された。

発表者は、本事業の一つであった「ペルーに対する体育教師の能力開発支援」のプロジェクトリーダーを務めた。ペルーでは2017年施行新カリキュラムにて小学校体育授業時間数が週2コマから3コマに増加し、適切な体育授業が展開できる体育教師の育成が急務となり、日本の知見の共有が求められることとなった。そこで、発表者らは、日本・ペルー両国での体育科教育専門家チームを作り、「体育授業研究」を紹介・導入する活動を実施した。

本プロジェクトでは、ペルーの文脈や、関係者の関心に応じた授業研究の展開を行い、現地専門家の主体性を尊重しながら、持続的発展を追及することを重視した。SFTプロジェクト終了後も、授業研究の展開を軸に、両国での交流が続いている。

本発表では、本プロジェクトでの具体的な活動内容やその成果について、関係者へのインタビューの結果なども踏まえつつ、報告したい。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

■ 2022年8月31日(水) 14:00 ~ 15:50 | Ⅲ 第3会場 3号館4階402教室

学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／共生社会の創造に向けた大学体育授業の可能性—多様性理解の観点から—

コーディネーター：今宿 裕（作新学院大学）、大林 太郎（筑波大学）

本シンポジウムでは、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という課題を達成するために、3年間のテーマ「大学体育から提案する質の高い学校保健体育の提供、実現」を設定した。2年目のテーマは「共生社会の創造に向けた大学体育授業の可能性—多様性理解の観点から—」である。

現代社会における課題の1つとして共生社会の創造を挙げることができるが、多様な人間の有り様を互いに尊重し他者と協働することができる人間を育成することが教育には求められる。それでは、身体や身体運動文化を基とする大学体育授業は如何なる貢献ができるのであろうか。本シンポジウムでは、多様性理解という観点から共生社会づくりに対する大学体育授業の可能性を検討するため、3つの立場からシンポジストにご発表いただく。その3つの立場とは、「障害学生支援」（向後氏・天野氏）、「ジェンダー・セクシュアリティ」（野口氏）、「多文化（異文化）」（細谷氏）である。各シンポジストの教育実践や経験を基に、共生社会の創造に必要な人材を育成するための大学体育授業の可能性をご提案いただき、これからの授業のあり方を検討する。

[学校保健体育-SA-1] 聴覚・視覚障害学生の体育授業

*向後 佑香¹、*天野 和彦¹ (1. 筑波技術大学)

[学校保健体育-SA-2] ジェンダー・セクシュアリティの視点を取り入れた大学体育授業の可能性

*野口 亜弥¹ (1. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

[学校保健体育-SA-3] 多文化理解につながる有形・無形文化財を活用した大学体育授業の可能性

*細谷 洋子¹ (1. 東洋大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／共生社会の創造に向けた大学体育授業の可能性ー多様性理解の観点からー

コーディネーター：今宿 裕（作新学院大学）、大林 太朗（筑波大学）

2022年8月31日(水) 14:00 ～ 15:50 第3会場 (3号館4階402教室)

本シンポジウムでは、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という課題を達成するために、3年間のテーマ「大学体育から提案する質の高い学校保健体育の提供、実現」を設定した。2年目のテーマは「共生社会の創造に向けた大学体育授業の可能性ー多様性理解の観点からー」である。

現代社会における課題の1つとして共生社会の創造を挙げることができるが、多様な人間の有り様を互いに尊重し他者と協働することができる人間を育成することが教育には求められる。それでは、身体や身体運動文化を基とする大学体育授業は如何なる貢献ができるのであろうか。本シンポジウムでは、多様性理解という観点から共生社会づくりに対する大学体育授業の可能性を検討するため、3つの立場からシンポジストにご発表いただく。その3つの立場とは、「障害学生支援」（向後氏・天野氏）、「ジェンダー・セクシュアリティ」（野口氏）、「多文化（異文化）」（細谷氏）である。各シンポジストの教育実践や経験を基に、共生社会の創造に必要な人材を育成するための大学体育授業の可能性をご提案いただき、これからの授業のあり方を検討する。

[学校保健体育-SA-1]聴覚・視覚障害学生の体育授業

*向後 佑香¹、*天野 和彦¹ (1. 筑波技術大学)

＜演者略歴＞向後佑香氏

筑波大学体育センター・特任助教（2012.7～2015.3）、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター・助教（2015.4～現在）

＜演者略歴＞天野和彦氏

筑波大学体育科学系・文部技官（1991.5～1993.3）、筑波大学体育科学系・助手（1993.4～1996.3）、筑波技術短期大学・助手（1996.4～2005.9）、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター・准教授（2005.10～現在）

平成28年4月1日より障害者差別解消法が施行されました。これに伴い、多くの大学で、障害学生の受け入れと障害学生に対する支援体制の整備が進んでいるものと思われます。一方で、障害種別や程度によって、求められる支援内容は多岐にわたるため、多様なニーズへの対応に困難を感じている大学もあると考えられます。そのような中、さらに座学とは異なる配慮が必要とされる体育授業において、障害学生への対応はまだ担当教員個人の試行錯誤に委ねられる部分が大きい状況にあるのではないのでしょうか。様々な背景を持つであろう全ての大学生に対して、より良質な大学体育の授業を提供していくためにも、大学における障害学生の教育・支援について実効性のある知見を大学間で共有していくことは大変重要と考えます。そこで、筑波技術大学はわが国で唯一の聴覚・視覚障害学生のための大学であることから、本シンポジウムでは、本学における体育授業の現状、および体育授業を行う際の聴覚・視覚障害学生のための配慮と工夫について発表します。この発表が障害理解の深化や大学での体育授業における支援拡充の一助となることを期待いたします。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／共生社会の創造に向けた大学体育授業の可能性ー多様性理解の観点からー

コーディネーター：今宿 裕（作新学院大学）、大林 太朗（筑波大学）

2022年8月31日(水) 14:00 ～ 15:50 第3会場 (3号館4階402教室)

本シンポジウムでは、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という課題を達成するために、3年間のテーマ「大学体育から提案する質の高い学校保健体育の提供、実現」を設定した。2年目のテーマは「共生社会の創造に向けた大学体育授業の可能性ー多様性理解の観点からー」である。

現代社会における課題の1つとして共生社会の創造を挙げることができるが、多様な人間の有り様を互いに尊重し他者と協働することができる人間を育成することが教育には求められる。それでは、身体や身体運動文化を基とする大学体育授業は如何なる貢献ができるのであろうか。本シンポジウムでは、多様性理解という観点から共生社会づくりに対する大学体育授業の可能性を検討するため、3つの立場からシンポジストにご発表いただく。その3つの立場とは、「障害学生支援」（向後氏・天野氏）、「ジェンダー・セクシュアリティ」（野口氏）、「多文化（異文化）」（細谷氏）である。各シンポジストの教育実践や経験を基に、共生社会の創造に必要な人材を育成するための大学体育授業の可能性をご提案いただき、これからの授業のあり方を検討する。

[学校保健体育-SA-2]ジェンダー・セクシュアリティの視点を取り入れた大学体育授業の可能性

*野口 亜弥¹ (1. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

<演者略歴>

順天堂大学スポーツ健康科学部助教。専門は「スポーツと開発」と「スポーツとジェンダー・セクシュアリティ」。米国の大学院卒業後、スウェーデンでプロ女子サッカー選手を経験。その後、ザンビアのNGOにて半年間、スポーツを通じたジェンダー平等を現場で実践。帰国後、スポーツ庁国際課に勤務し、2018年から所属大学で勤務を開始。現在、国際基督教大学博士後期課程課程在籍。一般社団法人S.C.P. Japan共同代表。

大学体育は教員が独自性を発揮し「楽しむこと」を中心に据えた授業づくりができることから、目的や意義はこれまで、運動機会の提供、生涯スポーツの導入、ソーシャルスキル獲得の場などと言われてきた。大学体育は学生のスポーツ参加のハードルを下げ、多様な目的を運動に持つ学生たちを包摂してきたと言えるであろう。一方で、これまでの大学体育において、ジェンダーやセクシュアリティの課題はあまり議論されてこなかった。女子学生の運動機会や種目選択は男子学生と本当の意味で平等なのだろうか。多様な性自認や性的指向を持つ学生たちにとって、機会の平等と心理的安全は保障されていると言えるのか。また、大学体育は学生たちが真の公正や平等について考え、議論を深める場としても有効であると考えられる。性別、性自認、性的指向、性表現に関わらず、誰もがスポーツに平等に安全・安心にアクセスできるスポーツ環境を議論することは、誰もが安心・安全に豊かに暮らせる共生社会を考えるきっかけも創出するであろう。小学校の義務教育から学生たちの身近に存在してきた体育だからこそ、ジェンダーやセクシュアリティの課題を身近に感じてもらうことができるのではないのか。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／共生社会の創造に向けた大学体育授業の可能性ー多様性理解の観点からー

コーディネーター：今宿 裕（作新学院大学）、大林 太朗（筑波大学）

2022年8月31日(水) 14:00 ～ 15:50 第3会場 (3号館4階402教室)

本シンポジウムでは、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という課題を達成するために、3年間のテーマ「大学体育から提案する質の高い学校保健体育の提供、実現」を設定した。2年目のテーマは「共生社会の創造に向けた大学体育授業の可能性ー多様性理解の観点からー」である。

現代社会における課題の1つとして共生社会の創造を挙げることができるが、多様な人間の有り様を互いに尊重し他者と協働することができる人間を育成することが教育には求められる。それでは、身体や身体運動文化を基とする大学体育授業は如何なる貢献ができるのであろうか。本シンポジウムでは、多様性理解という観点から共生社会づくりに対する大学体育授業の可能性を検討するため、3つの立場からシンポジストにご発表いただく。その3つの立場とは、「障害学生支援」（向後氏・天野氏）、「ジェンダー・セクシュアリティ」（野口氏）、「多文化（異文化）」（細谷氏）である。各シンポジストの教育実践や経験を基に、共生社会の創造に必要な人材を育成するための大学体育授業の可能性をご提案いただき、これからの授業のあり方を検討する。

[学校保健体育-SA-3]多文化理解につながる有形・無形文化財を活用した大学体育授業の可能性

*細谷 洋子¹ (1. 東洋大学)

<演者略歴>

博士（スポーツ科学）。早稲田大学大学院博士後期課程単位取得退学後、四国大学講師、リオデジャネイロ州立大学客員研究員を経て2018年より現職。ダンスや体操経験を活かし大学在学中にカポエイラを始め、国際大会優勝・入賞多数。エスニックスportsの変容や教材化を研究する。本学会ではスポーツ人類学専門領域所属。

これまで発表者は、2008年から断続的に、有形・無形文化財を活用した大学体育授業（半期・集中・単発含む）を行ってきた。前者については、日本遺産有形文化財である四国遍路の一番札所から六番札所（約15km）までの歩き遍路体験を通じて、ウォーキングによる健康維持促進と、地域住民との触れ合い（お接待含む）による地域文化理解を深めることを目指した。一方、後者については、ユネスコ無形文化財のブラジル伝統格闘技カポエイラを扱った。授業では技術習得のみならず、既存の競技スポーツと異なる価値観で行われるカポエイラ固有の世界観の体験を通じた異文化理解促進を目指した。真の多文化・異文化理解とは一朝一夕の知識習得や体験だけでは決して成しえないが、体育授業における、自らの身体を介する短期的体験だけでも、異文化理解の入口として当該文化を内側から捉える好機となる。こうした体験は、受講生のその後における多文化をとらえる視点づくりに有益なのではないか。そのような観点から、両者のこれまでの実践事例を踏まえて、共生社会の創造に向けた大学体育授業の可能性について提案する。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

■ 2022年9月1日(木) 10:30 ~ 12:20 | Ⅲ 第8会場 2号館2階21教室

健康福祉研究部会【課題B】 テーマ別シンポジウム／運動から認知へ、認知から運動へ

コーディネーター：木伏 紅緒（神戸大学）、細谷 洋子（東洋大学）

指定討論者：岩沼 聡一郎（帝京科学大学）

慢性的運動が認知機能改善に及ぼす効果について高い期待がある。本シンポジウムは、認知機能改善という目標に対して、体育・スポーツに携わる研究者がどのように貢献すべきなのかを考える機会として企画された。本年度は、運動機能と認知機能には互惠的關係（reciprocity）があるため、単に運動から認知への波及を考えるだけでなく、認知から運動への波及を合わせて考える必要があることを、主たるテーマとする。辻氏には、主に高齢者を対象とした大規模コホート研究から得られた知見を基に、個人と地域環境のマルチレベルな視点から、運動・スポーツと認知機能・認知症との関連についての話題提供を受ける。古和氏には、認知症ならびにその予防に関する最新の知見や取組みを、医師の視点からご紹介いただく。田中氏には、心理的ストレスが運動にどう影響するかについて、最新の知見や実践場面への応用をご紹介いただく。

[健康福祉-SB-1] 運動・スポーツが盛んな地域に暮らすだけで認知機能が維持される！？

*辻 大士¹ (1. 筑波大学)

[健康福祉-SB-2] 認知症予防を目指した多因子介入の現状と課題

*古和 久朋¹ (1. 神戸大学大学院保健学研究科)

[健康福祉-SB-3] 心理的ストレス状況下での認知と運動

*田中 美吏¹ (1. 武庫川女子大学)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題B】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

健康福祉研究部会【課題B】 テーマ別シンポジウム／運動から認知へ、認知から運動へ

コーディネーター：木伏 紅緒（神戸大学）、細谷 洋子（東洋大学）

指定討論者：岩沼 聡一郎（帝京科学大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第8会場 (2号館2階21教室)

慢性的運動が認知機能改善に及ぼす効果について高い期待がある。本シンポジウムは、認知機能改善という目標に対して、体育・スポーツに携わる研究者がどのように貢献すべきなのかを考える機会として企画された。本年度は、運動機能と認知機能には互惠的關係（reciprocity）があるため、単に運動から認知への波及を考えるだけでなく、認知から運動への波及を合わせて考える必要があることを、主たるテーマとする。辻氏には、主に高齢者を対象とした大規模コホート研究から得られた知見を基に、個人と地域環境のマルチレベルな視点から、運動・スポーツと認知機能・認知症との関連についての話題提供を受ける。古和氏には、認知症ならびにその予防に関する最新の知見や取組みを、医師の視点からご紹介いただく。田中氏には、心理的ストレスが運動にどう影響するかについて、最新の知見や実践場面への応用をご紹介いただく。

[健康福祉-SB-1]運動・スポーツが盛んな地域に暮らすだけで認知機能が維持される！？

*辻 大士¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

博士（体育科学） 筑波大学大学院体育科学専攻を修了後、ユヴァスキュラ大学ジェロントロジーリサーチセンターポスドク研究員、千葉大学予防医学センター特任助教を経て現職。主に高齢者を対象とした運動・スポーツ疫学、公衆衛生学を専門とする。本学会では「測定評価」「介護予防・健康づくり」専門領域に所属。

高齢者を対象とした多くの観察研究や介入研究の知見が蓄積され、適度な身体活動の実践は認知機能を良好に保ち、認知症予防に寄与する可能性が示されてきた。さらに、運動・スポーツは一人でおこなうよりも、グループに参加して誰かと一緒におこなうことで、得られる健康効果がさらに大きくなることも注目されている。これらの報告は個人のライフスタイルと認知機能の関連に着目したものであるが、近年、高齢者が暮らす地域環境が、認知症リスクを増減させる可能性も見えてきた。その環境要因の一つとして「運動・スポーツの盛んさ」があることを、演者らは全国7道県・16市町村に在住する約4万人の高齢者を6年間追跡したコホート研究により明らかにした。地域（≡学区）の中で、10人に1人の高齢者が運動・スポーツのグループに新たに参加するようになった（参加者割合が10%ポイント高くなった）と仮定した場合に、その地域に暮らす全ての高齢者の認知症リスクが（その人自身の参加・不参加を問わず）8%低くなることを突き止めた。なぜこのようなことが起こりうるのか、運動・スポーツの振興が認知機能の維持・向上に果たす新たな可能性について紹介する。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題B】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／運動から認知へ、認知から運動へ

コーディネーター：木伏 紅緒（神戸大学）、細谷 洋子（東洋大学）

指定討論者：岩沼 聡一郎（帝京科学大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第8会場 (2号館2階21教室)

慢性的運動が認知機能改善に及ぼす効果について高い期待がある。本シンポジウムは、認知機能改善という目標に対して、体育・スポーツに携わる研究者がどのように貢献すべきなのかを考える機会として企画された。本年度は、運動機能と認知機能には互惠的關係 (reciprocity) があるため、単に運動から認知への波及を考えるだけでなく、認知から運動への波及を合わせて考える必要があることを、主たるテーマとする。辻氏には、主に高齢者を対象とした大規模コホート研究から得られた知見を基に、個人と地域環境のマルチレベルな視点から、運動・スポーツと認知機能・認知症との関連についての話題提供を受ける。古和氏には、認知症ならびにその予防に関する最新の知見や取組みを、医師の視点からご紹介いただく。田中氏には、心理的ストレスが運動にどう影響するかについて、最新の知見や実践場面への応用をご紹介いただく。

[健康福祉-SB-2]認知症予防を目指した多因子介入の現状と課題

*古和 久朋¹ (1. 神戸大学大学院保健学研究科)

＜演者略歴＞

1995年東京大学医学部医学科卒業、1999年日本神経学会専門医、2004年博士(医学)取得。2005年マサチューセッツ総合病院に留学。帰国後、東大神経内科特任助教を経て2010年より神戸大学神経内科講師、2012年同神経内科准教授、2017年同保健学研究科教授。2021年4月より認知症予防推進センター長を兼務。

認知症高齢者数が600万人を超え、2025年には高齢者の約5人に一人が認知症になると見込まれておりこの対策は喫緊の課題である。認知症の主たる原因疾患であるアルツハイマー病の特徴的な病理構造物である老人斑を標的とした根本治療薬開発が進行中で、そのうちの一つが2021年6月に米国で条件付きながら認可された。しかしながらその効果は症状の進行を2割前後遅らせる程度であり、失われた認知機能を元に戻すことはできず、人々の期待に十分応えたとは言えない。未発症の段階での薬物投与が検討されているが副作用の可能性もあり、非薬物介入による予防への関心が高まっている。実際、フィンランドの高齢者を対象とした多因子介入ランダム化比較試験 (FINGER研究) により食事、運動、脳トレ、血管因子モニターなどの総合的な介入により認知機能の悪化を予防しうることが示された。介入因子は人種や文化によりその内容も異なることから、我が国でもJ-MINT研究として実証研究が進行中である。こうした介入研究の成果を、老人斑の蓄積予防や減少につながる機序とともに紹介するとともに、こうした介入の社会実装を目指す際の課題や解決法についても議論したい。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題B】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／運動から認知へ、認知から運動へ

コーディネーター：木伏 紅緒（神戸大学）、細谷 洋子（東洋大学）

指定討論者：岩沼 聡一郎（帝京科学大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第8会場 (2号館2階21教室)

慢性的運動が認知機能改善に及ぼす効果について高い期待がある。本シンポジウムは、認知機能改善という目標に対して、体育・スポーツに携わる研究者がどのように貢献すべきなのかを考える機会として企画された。本年度は、運動機能と認知機能には互惠的關係（reciprocity）があるため、単に運動から認知への波及を考えるだけでなく、認知から運動への波及を合わせて考える必要があることを、主たるテーマとする。辻氏には、主に高齢者を対象とした大規模コホート研究から得られた知見を基に、個人と地域環境のマルチレベルな視点から、運動・スポーツと認知機能・認知症との関連についての話題提供を受ける。古和氏には、認知症ならびにその予防に関する最新の知見や取組みを、医師の視点からご紹介いただく。田中氏には、心理的ストレスが運動にどう影響するかについて、最新の知見や実践場面への応用をご紹介いただく。

[健康福祉-SB-3]心理的ストレス状況下での認知と運動

*田中 美吏¹ (1. 武庫川女子大学)

<演者略歴>

博士（学術）。広島大学大学院生物圏科学研究科を修了後、帝塚山大学経済学部講師、福井大学教育地域科学部講師を経て現職。本学会では「体育心理」専門領域に所属。日本スポーツ心理学会認定上級メンタルトレーニング指導士。

心理的なストレス状況下での運動には、注意や思考などの認知が介在することについて、豊富な理論やエビデンスが存在する。注意に関しては、注意狭隘、注意散漫、意識的処理が関与する。思考に関しては、「～してはいけない」と考えると矛盾にもその運動をしてしまう皮肉課程や、ステレオタイプ、苦手意識などが挙げられる。演者は、これまでに、上記の認知的要因を包含しながら、心理的ストレス（プレッシャー）状況下での運動やパフォーマンスを調べる研究に取り組んできた。本話題提供では、ストレス状況下での認知と運動に関する諸理論を紹介したうえで、演者の研究成果や関連研究を交えながら、ストレス状況下での運動に対する注意や思考の影響について理解を促進することを狙いとする。ストレス状況下での運動への対処を考える際には、これらの認知的要因を考慮することの重要性について、本話題提供を通して議論されたい。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

■ 2022年9月1日(木) 10:30 ~ 12:20 | Ⅲ 第10会場 2号館4階45教室

スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」はいかにして可能かー身体・組織・支援の観点からー

コーディネーター：加藤 えみか（京都産業大学）、高尾 尚平（日本体育大学）

指定討論者：渡 正（順天堂大学）

「多様性と調和」。これは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のコンセプトの1つである。このコンセプトが象徴するように、今日では、「多様性と調和」の推進がスポーツに求められている。こうした理念からは、少なくとも、2つの課題を引き出すことができる。1つは、スポーツにおける「多様性と調和」であり、いま1つは、スポーツをとおした「多様性と調和」である。両者は、ともに、喫緊の実践的・社会的課題であるといえる。しかし、立ち止まって考えてみると、スポーツと「多様性と調和」の結びつきは自明ではない。スポーツは、むしろ、多様性を排除する機構にもなりえてしまうからである。スポーツは、「多様性と調和」が期待される文化である一方で、ジェンダーや身体的特性などに伴う分断を創出する装置にもなりうる。こうした両義性を引き受けたうえで、われわれはなおも、スポーツに「多様性と調和」を期することはできるのだろうか。そもそも、「多様性と調和」とはどのような事態を指すのだろうか。本企画では、パラスポーツを手がかりにしつつ、スポーツにおける／スポーツをとおした「多様性と調和」の可能性について議論する。

[スポーツ文化-SB-1] 身体論から捉える「多様性と調和」

*田中 愛¹ (1. 明星大学)

[スポーツ文化-SB-2] パラリンピックを通して考える共生社会

*河合 純一¹ (1. 公益財団法人日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会)

[スポーツ文化-SB-3] パラリンピック競技選手を対象とした体力測定プロトコルの検討

*袴田 智子¹ (1. 国立スポーツ科学センター)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」はいかにして可能か 一身体・組織・支援の観点からー

コーディネーター：加藤 えみか（京都産業大学）、高尾 尚平（日本体育大学）

指定討論者：渡 正（順天堂大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第10会場 (2号館4階45教室)

「多様性と調和」。これは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のコンセプトの1つである。このコンセプトが象徴するように、今日では、「多様性と調和」の推進がスポーツに求められている。こうした理念からは、少なくとも、2つの課題を引き出すことができる。1つは、スポーツにおける「多様性と調和」であり、いま1つは、スポーツをとおした「多様性と調和」である。両者は、ともに、喫緊の実践的・社会的課題であるといえる。しかし、立ち止まって考えてみると、スポーツと「多様性と調和」の結びつきは自明ではない。スポーツは、むしろ、多様性を排除する機構にもなりえてしまうからである。スポーツは、「多様性と調和」が期待される文化である一方で、ジェンダーや身体的特性などに伴う分断を創出する装置にもなりうる。こうした両義性を引き受けたうえで、われわれはなおも、スポーツに「多様性と調和」を期することはできるのだろうか。そもそも、「多様性と調和」とはどのような事態を指すのだろうか。本企画では、パラスポーツを手がかりにしつつ、スポーツにおける／スポーツをとおした「多様性と調和」の可能性について議論する。

[スポーツ文化-SB-1]身体論から捉える「多様性と調和」

*田中 愛¹ (1. 明星大学)

<演者略歴>

2008年東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科修了。博士（教育学）。武蔵大学人文学部准教授を経て現職。「実践からの体育・スポーツ哲学」を研究の目標としつつ、「身体教育とは何か？」を問う中で出会ったシッティングバレーボール（パラバレーボール）の練習を継続中。

本発表では、身体論の立場から、スポーツ実践における／をとおした「多様性と調和」の内実を探りたい。その際、「における」と「をとおした」がどのようにつながり得るかについても検討したい。発表者がパラバレーを体験した際に受けたカルチャーショックは、「多様性」とはどういうことか考える契機となった。同時にその態度では、「珍しさ」や、知らなかったことへの「驚き」が先行してしまい、実践の中で何が生じているかを捉え損ねていた。しかし、練習や試合を通してパラバレーに身を投じていく中で、多様性という「概念」は「どうしようもない〈できなさ〉を受け止める」という具体的行為の中の実感に変わっていった。

このような立場から改めて「多様性」という言葉について考えてみれば、当然のことながら違和感が生じる。本発表では、この違和感の源泉を、「多様性の内と外」および「西洋医学的身体観」に立ち止まることによって考えたい。このことは、社会やスポーツにおける「普通」の成り立ちとその強固さに立ち止まることでもある。そうすることによって、「多様性」という言葉が一人歩きすることについても問題提起したい。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／スポーツにおける ／をととした「多様性と調和」はいかにして可能か 一身体・組織・支援の 観点からー

コーディネーター：加藤 えみか（京都産業大学）、高尾 尚平（日本体育大学）

指定討論者：渡 正（順天堂大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第10会場 (2号館4階45教室)

「多様性と調和」。これは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のコンセプトの1つである。このコンセプトが象徴するように、今日では、「多様性と調和」の推進がスポーツに求められている。こうした理念からは、少なくとも、2つの課題を引きだすことができる。1つは、スポーツにおける「多様性と調和」であり、いま1つは、スポーツをととした「多様性と調和」である。両者は、ともに、喫緊の実践的・社会的課題であるといえる。しかし、立ち止まって考えてみると、スポーツと「多様性と調和」の結びつきは自明ではない。スポーツは、むしろ、多様性を排除する機構にもなりえてしまうからである。スポーツは、「多様性と調和」が期待される文化である一方で、ジェンダーや身体的特性などに伴う分断を創出する装置にもなりうる。こうした両義性を引き受けたうえで、われわれはなおも、スポーツに「多様性と調和」を期することはできるのだろうか。そもそも、「多様性と調和」とはどのような事態を指すのだろうか。本企画では、パラスポーツを手がかりにしつつ、スポーツにおける／スポーツをととした「多様性と調和」の可能性について議論する。

[スポーツ文化-SB-2]パラリンピックを通して考える共生社会

*河合 純一¹ (1. 公益財団法人日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会)

<演者略歴>

1975年静岡県生まれ。早稲田大学大学院教育学研究科修了。パラリンピック6大会に出場、金5を含む全21個のメダルを獲得（日本人最多）。2016年、パラリンピック殿堂入り(日本人初)。筑波大学、上智大学、慶応義塾大学非常勤講師。東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター協力研究員。東京2020パラリンピック競技大会/北京2022パラリンピック冬季競技大会日本代表選手団団長。

パラリンピックは世界最高峰のパラアスリート(障害のあるアスリート)の競技会であり、ハイパフォーマンススポーツとしての地位を確立してきた。そこで、東京2020パラリンピック競技大会、北京2022パラリンピック冬季競技大会日本代表選手団の活躍を振り返りつつ、日本社会に及ぼした影響を考察する。また、東京2020大会の基本コンセプトの1つであった「多様性と調和」を実現してきた事例を大会開催決定後からの動きを中心に紹介する。中でもパラリンピック教材『I' mPOSSIBLE（アイムポッシブル）』、東京2020アクセシビリティガイドラインの作成、活用事例をパラリンピックの歴史や意義に触れつつ説明する。

その上でD&I「ダイバーシティ(多様性)とインクルージョン(包摂性)」の違いを説明し、共生社会(インクルーシブな社会)を実現するための段階(ステップ)について検討する。

最後にパラリンピックは「人間の可能性の祭典」であると伝え続けてきた立場から、共生社会のイメージを共有し、J P S A 2030年ビジョンにある「活力ある共生社会の実現」の可能性を示す。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／スポーツにおける／をととした「多様性と調和」はいかにして可能か 一身体・組織・支援の観点からー

コーディネーター：加藤 えみか（京都産業大学）、高尾 尚平（日本体育大学）

指定討論者：渡 正（順天堂大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第10会場 (2号館4階45教室)

「多様性と調和」。これは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のコンセプトの1つである。このコンセプトが象徴するように、今日では、「多様性と調和」の推進がスポーツに求められている。こうした理念からは、少なくとも、2つの課題を引き出すことができる。1つは、スポーツにおける「多様性と調和」であり、いま1つは、スポーツをととした「多様性と調和」である。両者は、ともに、喫緊の実践的・社会的課題であるといえる。しかし、立ち止まって考えてみると、スポーツと「多様性と調和」の結びつきは自明ではない。スポーツは、むしろ、多様性を排除する機構にもなりえてしまうからである。スポーツは、「多様性と調和」が期待される文化である一方で、ジェンダーや身体的特性などに伴う分断を創出する装置にもなりうる。こうした両義性を引き受けたうえで、われわれはなおも、スポーツに「多様性と調和」を期することはできるのだろうか。そもそも、「多様性と調和」とはどのような事態を指すのだろうか。本企画では、パラスポーツを手がかりにしつつ、スポーツにおける／スポーツをととした「多様性と調和」の可能性について議論する。

[スポーツ文化-SB-3]パラリンピック競技選手を対象とした体力測定プロトコルの検討

*袴田 智子¹ (1. 国立スポーツ科学センター)

<演者略歴>

独立行政法人日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター 国立スポーツ科学センター スポーツ科学・研究部研究員。日本体育大学大学院博士後期課程修了、日本体育大学スポーツ・トレーニングセンター助教を経て現職。主に形態・身体組成に関する研究に従事。所属学会：日本バイオメカニクス学会、日本体育学会、日本体力医学会、国際バイオメカニクス学会、アメリカスポーツ医学会など。

国立スポーツ科学センター（以下、JISS）では、2001年よりオリンピックアスリートを対象に体力測定を行ってきたが、2015年からは、パラリンピックアスリートについても、オリンピックアスリートと同様に体力測定を実施している。競技者を対象とした体力測定は、主に、選手自身のコンディション把握、トレーニング効果を確認する目的で実施される。測定項目や測定プロトコルについては、類似したオリンピック競技の体力測定項目を参考にし、競技種目や選手に応じて調整している。現在、JISSでは、夏季・冬季の競技を合わせて8競技12種別、年間延べ100名程度のパラリンピックアスリートの測定を行っている。障がい種別では、肢体不自由（欠損、四肢麻痺、脊髄損傷）、視覚障がい、知的障がい等に対応している。体力測定を実施する中で、パラリンピックアスリート特有の課題も浮き彫りになった。本シンポジウムでは、これまで我々が体力測定を通して得られた、課題や対応策についてご紹介するとともに、競技力向上を目的とした医・科学サポートにおける多様性と調和について、議論を深めていきたいと思う。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

■ 2022年9月1日(木) 10:30 ~ 12:20 | 第1会場 3号館3階301教室

学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業とその学習内容を考えるー「豊かなスポーツライフ」の実現をキーワードにしてー

コーディネーター：岩田 英樹（金沢大学）、伊佐野 龍司（日本大学）

第71回大会では、コロナ禍を経験した私たちにとって、人と人との関わりには根源的な重要性があることを再確認するとともに、それを具現化する場としての体育・保健の授業の意味の大きさを確かめることができた。これからの体育・保健体育を見通そうとした時、私たちは子どもたちに授業を通して何を伝えていくべきなのだろうか。学校体育・保健体育は「豊かなスポーツライフ」に向けた取り組みを進めることとされているが、子どもたちに伝えるべき／子どもたちが身に付けるべきものとして、何を考えていくべきなのだろうか。

このような問題意識から本シンポジウムでは、これからの体育・保健体育で扱うべき学習指導内容について多角的に議論し、今後の教育課程の方向性に対する示唆を得ることを目的とした。議論の視点として、「豊かなスポーツライフ」を実現する子どもたちが共有すべき視点について検討するとともに、近年の社会的・教育的動向を踏まえて、「ともに」学ぶという視点、「『自分からみんなへ』という視点の移行」、「学校と地域」の連携によるより良質な授業実践といったことを取り上げていきたい。

[学校保健体育-SB-1] 「これからの豊かなスポーツライフ」に求められること

*塩見 英樹¹ (1. スポーツ庁政策課)

[学校保健体育-SB-2] 「ともに」学び育つことの意義と豊かなスポーツライフ

*梅澤 秋久¹ (1. 横浜国立大学)

[学校保健体育-SB-3] 「自分の健康」だけでなく「みんなの健康へ」という視点

*今関 豊一¹ (1. 東京国際大学)

[学校保健体育-SB-4] 「学校と地域の連携」という視点からみた豊かなスポーツライフ

*清田 美紀¹ (1. 東広島市教育委員会)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業とその学習内容を考えるー「豊かなスポーツライフ」の実現をキーワードにしてー

コーディネーター：岩田 英樹（金沢大学）、伊佐野 龍司（日本大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第1会場 (3号館3階301教室)

第71回大会では、コロナ禍を経験した私たちにとって、人と人との関わりには根源的な重要性があることを再確認するとともに、それを具現化する場としての体育・保健の授業の意味の大きさを確かめることができた。これからの体育・保健体育を見通そうとした時、私たちは子どもたちに授業を通して何を伝えていくべきなのだろうか。学校体育・保健体育は「豊かなスポーツライフ」に向けた取り組みを進めることとされているが、子どもたちに伝えるべき／子どもたちが身に付けるべきものとして、何を考えていくべきなのだろうか。

このような問題意識から本シンポジウムでは、これからの体育・保健体育で扱うべき学習指導内容について多角的に議論し、今後の教育課程の方向性に対する示唆を得ることを目的とした。議論の視点として、「豊かなスポーツライフ」を実現する子どもたちが共有すべき視点について検討するとともに、近年の社会的・教育的動向を踏まえて、「ともに」学ぶという視点、「『自分からみんなへ』という視点の移行」、「学校と地域」の連携によるより良質な授業実践といったことを取り上げていきたい。

[学校保健体育-SB-1]「これからの豊かなスポーツライフ」に求められること

*塩見 英樹¹ (1. スポーツ庁政策課)

＜演者略歴＞

京都市立小学校教員、副教頭を経た後、京都市教育委員会で小学校体育科（運動領域）の主任指導主事。平成31年度より、国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官、スポーツ庁政策課教科調査官。

令和3年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査において、体力合計点は、令和元年度調査に続いて低下する結果となった。質問紙調査では、「コロナの影響を受けて運動やスポーツをする時間が減少した」と回答する児童生徒が約4割にのぼった。一方で、運動やスポーツをする時間が増加したと回答した児童生徒は約3割であり、その特徴としては、運動やスポーツの大切さを認識しており、体力が高い傾向が認められた。このことから、学校や家庭において日頃から児童生徒に、運動やスポーツをすることの大切さを伝えるとともに、運動の楽しさを実感し、工夫しながら運動をする習慣の定着に努めることの大切さがうかがわれた。

第3期スポーツ基本計画においても、体育・保健体育の授業等を通じて、運動好きな子供や日常から運動に親しむ子供を増加させ、生涯にわたって運動やスポーツを継続し、心身共に健康で幸福な生活を営むことができる資質や能力の育成を図ることが示されている。

本シンポジウムでは、学習指導要領の目標や内容等を踏まえ、児童生徒が飽くまで、運動やスポーツを楽しみ喜びを感じながら取り組むことができるようにする体育授業の在り方についてお伝えしたい。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業とその学習内容を考えるー「豊かなスポーツライフ」の実現をキーワードにしてー

コーディネーター：岩田 英樹（金沢大学）、伊佐野 龍司（日本大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第1会場 (3号館3階301教室)

第71回大会では、コロナ禍を経験した私たちにとって、人と人との関わりには根源的な重要性があることを再確認するとともに、それを具現化する場としての体育・保健の授業の意味の大きさを確かめることができた。これからの体育・保健体育を見通そうとした時、私たちは子どもたちに授業を通して何を伝えていくべきなのだろうか。学校体育・保健体育は「豊かなスポーツライフ」に向けた取り組みを進めることとされているが、子どもたちに伝えるべき／子どもたちが身に付けるべきものとして、何を考えていくべきなのだろうか。

このような問題意識から本シンポジウムでは、これからの体育・保健体育で扱うべき学習指導内容について多角的に議論し、今後の教育課程の方向性に対する示唆を得ることを目的とした。議論の視点として、「豊かなスポーツライフ」を実現する子どもたちが共有すべき視点について検討するとともに、近年の社会的・教育的動向を踏まえて、「ともに」学ぶという視点、「『自分からみんなへ』という視点の移行」、「学校と地域」の連携によるより良質な授業実践といったことを取り上げていきたい。

[学校保健体育-SB-2]「ともに」学び育つことの意義と豊かなスポーツライフ

*梅澤 秋久¹ (1. 横浜国立大学)

<演者略歴>

1971年生まれ。横浜国立大学教育学部教授 博士（教育学）。神奈川県公立小学校教員を15年勤めた後に2009年に帝京大学文学部教育学科専任講師として着任し2011年より准教授。2013年横浜国立大学教育人間科学部に准教授として着任し、2017年より現職。

気候変動やコロナパンデミック、紛争等の世界規模のアポリアの連続は、刹那的で利己的な価値観の終焉を指南する。持続可能性が希求される中、SDGsの第3目標は「Good Health and Well-being（すべての人に健康と福祉を）」であり、第4目標は「Quality Education（質の高い教育を）」である。いずれも本学会の貢献が期待される目標であるが、その共通点は「全ての人」、「包摂」、「公正」、「Well-being」等であろう。

本シンポジウムでは、「ともに」学び育つ対象を全ての多様性とし、障害の有無、ジェンダー、運動格差、年齢差等の格差を包摂する「共生体育」の在り方について言及する。「今だけ、ここだけ、私だけ」という快楽主義（ヘドニア）的な思想から、「今-ここ-わたしたち」の没頭（Engagement）を通じた関係性（Relationship）、意味（Meaning）、達成（Accomplishment）という持続的 Well-beingをつくりあう体育において検討していく。そのような体育を探究するためには教師集団も同僚性を基盤とし「ともに」学び育つ必要があると考えられる。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業とその学習内容を考えるー「豊かなスポーツライフ」の実現をキーワードにしてー

コーディネーター：岩田 英樹（金沢大学）、伊佐野 龍司（日本大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第1会場 (3号館3階301教室)

第71回大会では、コロナ禍を経験した私たちにとって、人と人との関わりには根源的な重要性があることを再確認するとともに、それを具現化する場としての体育・保健の授業の意味の大きさを確かめることができた。これからの体育・保健体育を見通そうとした時、私たちは子どもたちに授業を通して何を伝えていくべきなのだろうか。学校体育・保健体育は「豊かなスポーツライフ」に向けた取り組みを進めることとされているが、子どもたちに伝えるべき／子どもたちが身に付けるべきものとして、何を考えていくべきなのだろうか。

このような問題意識から本シンポジウムでは、これからの体育・保健体育で扱うべき学習指導内容について多角的に議論し、今後の教育課程の方向性に対する示唆を得ることを目的とした。議論の視点として、「豊かなスポーツライフ」を実現する子どもたちが共有すべき視点について検討するとともに、近年の社会的・教育的動向を踏まえて、「ともに」学ぶという視点、「『自分からみんなへ』という視点の移行」、「学校と地域」の連携によるより良質な授業実践といったことを取り上げていきたい。

[学校保健体育-SB-3]「自分の健康」だけでなく「みんなの健康へ」という視点

*今関 豊一¹ (1. 東京国際大学)

<演者略歴>

1955年生まれ 東京国際大学人間社会学部教授 博士（スポーツ健康科学）、千葉県立高等学校教諭、文部科学省教科調査官及び国立教育政策研究所教育課程調査官（体育担当、保健担当）、順天堂大学スポーツ健康科学部准教授、国立教育政策研究所基礎研究部部長、日本体育大学大学院教育学研究科及び児童スポーツ教育学部教授を経て2022年より現職。

「自分の健康」だけでなく「みんなの健康へ」とは、健康になるための個人の対処で自分自身に向けられる健康行動として、また個人が集まって複数以上で対処する健康行動としてとらえることができる。それらは、個人、お互いの健康が「低下を抑制する」「維持する」「高まる」ように相互作用が行われるであろう。

「自分の健康」は、「身体的」「精神的」「社会的（対人的）」で、また「みんなの健康」は、「自分の健康」に加えて「社会環境（制度を含む）」でとらえることができよう。

「より良質な学習」は「Quality of Life」の一部としてとらえる。学習での具体は、課題追究、話し合い、お互いの意見や考えの共有、といった場面で質的に充実することであろう。学習の成立は、相手の立ち位置になって「自分のことだ」と置き換えること、自分の考えが自覚できる（見える）ことが条件になってくるのではない。学習過程は、「『個々の追究1』－『活動（話し合い）1』－『共有』－『活動（話し合い）2』－『振り返り（個々の追究2）』」の繰り返しと考えられる。

このような取り組みが良質な保健体育の授業につながり、豊かなスポーツライフの実現に向かうことになるのではない。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業とその学習内容を考えるー「豊かなスポーツライフ」の実現をキーワードにしてー

コーディネーター：岩田 英樹（金沢大学）、伊佐野 龍司（日本大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第1会場 (3号館3階301教室)

第71回大会では、コロナ禍を経験した私たちにとって、人と人との関わりには根源的な重要性があることを再確認するとともに、それを具現化する場としての体育・保健の授業の意味の大きさを確かめることができた。これからの体育・保健体育を見通そうとした時、私たちは子どもたちに授業を通して何を伝えていくべきなのだろうか。学校体育・保健体育は「豊かなスポーツライフ」に向けた取り組みを進めることとされているが、子どもたちに伝えるべき／子どもたちが身に付けるべきものとして、何を考えていくべきなのだろうか。

このような問題意識から本シンポジウムでは、これからの体育・保健体育で扱うべき学習指導内容について多角的に議論し、今後の教育課程の方向性に対する示唆を得ることを目的とした。議論の視点として、「豊かなスポーツライフ」を実現する子どもたちが共有すべき視点について検討するとともに、近年の社会的・教育的動向を踏まえて、「ともに」学ぶという視点、「『自分からみんなへ』という視点の移行」、「学校と地域」の連携によるより良質な授業実践といったことを取り上げていきたい。

[学校保健体育-SB-4]「学校と地域の連携」という視点からみた豊かなスポーツライフ

*清田 美紀¹ (1. 東広島市教育委員会)

<演者略歴>

広島県公立小学校教員、広島県西部教育事務所教育指導課指導主事、広島県教育委員会スポーツ振興課企画調整担当指導主事、学校体育係指導主事を経て、2016年より現職。

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、これまで経験したことのない制限の中での教育活動が余儀なくされている。体育・保健体育授業、運動・スポーツに関する活動については、他の教育活動と比較して配慮すべき事項が多く、子供たちが伸び伸びと身体活動を通して学び合う場や時間を確保しにくい状況がある。

こうした状況の中で、子供たちの学びを保障していくためには、学校を取り巻く地域の多様な人材が教育活動に参画していく環境を創ることで、様々な状況や困難な課題にも柔軟に対応することが可能となっていくのではないだろうか。多様な背景を有する人材が、各々の専門性に応じて、体育・保健体育授業や、運動・スポーツに関わる活動に参画することで、子供たちは、新たな視点で運動やスポーツとの多様な関わり方について考え、運動やスポーツの楽しさや喜びを味わうことにつながっていくのではないだろうか。

これからの社会を豊かに生きていけるよう、子供たちを運動・スポーツ・健康の側面から育てていくため、今できること、そして今後の在り方について、学校と地域の連携の視点から、いくつかの事例を交えて考えてみたい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

■ 2022年9月1日(木) 10:30 ~ 12:20 | 第2会場 3号館4階401教室

生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／子どもたちのWell-Beingとスポーツ政策・産業・そして遊び

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

新型コロナウイルスの終息に向けた模索は体育・スポーツ界でも今なお続けられている。このコロナ禍において、昨年の生涯スポーツ部会の本課題グループでは産業界の興隆とスポーツ、さらに身体運動する人間の幸福——体育・スポーツにおけるWell-Being——の所在をめぐって討議が行われた。その結果、スポーツ文化の未来を担う子どもたちのスポーツ環境と教育体制、さらにコロナ対策をはじめ子どもたちを取り巻く困難な状況において子どもたちのスポーツ実践をどのように保証し、さらにWell-Beingの実現に向けた指針をいかに定めればよいかとの問いが立ち現れた。

本シンポジウムでは、昨年度のシンポジウムにて遺された課題を踏まえて子どもたちとスポーツ、そして遊びの関係をめぐる歴史的変遷と総説、またいわゆる「スポーツ格差」など子どもたちのスポーツ環境と実践に係る諸問題を経営・政策の視点より捉えた分析、さらにコロナ禍を生きる子どもたちが直面するスポーツと遊びの「現場」から見えてきた課題と展望について議論が交わされる。

スポーツを享受するうえでの子どもたちのスポーツ実践と環境、そして教育をめぐる体制作りと指針の策定はいま不可欠な検討課題といえよう。

[生涯スポーツ-SB-1] 遊びの精神から見た子どものWell-Beingの実現とスポーツ

*松田 恵示¹ (1. 東京学芸大学)

[生涯スポーツ-SB-2] 子どものスポーツにおける格差とWell-Being

研究上の課題を中心に

*宮本 幸子¹ (1. 笹川スポーツ財団)

[生涯スポーツ-SB-3] 幼児期から発現する身体発達の二極化を防ぐ施策の提案

幼少期のWell-Beingの保障のために

*春日 晃章¹ (1. 岐阜大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／子どもたちの Well-Beingとスポーツー政策・産業・そして遊びー

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第2会場 (3号館4階401教室)

新型コロナウイルスの終息に向けた模索は体育・スポーツ界でも今なお続けられている。このコロナ禍において、昨年の生涯スポーツ部会の本課題グループでは産業界の興隆とスポーツ、さらに身体運動する人間の幸福ー体育・スポーツにおけるWell-Beingーの所在をめぐって討議が行われた。その結果、スポーツ文化の未来を担う子どもたちのスポーツ環境と教育体制、さらにコロナ対策をはじめ子どもたちを取り巻く困難な状況において子どもたちのスポーツ実践をどのように保証し、さらにWell-Beingの実現に向けた指針をいかに定めればよいのかとの問いが立ち現れた。

本シンポジウムでは、昨年度のシンポジウムにて遺された課題を踏まえて子どもたちとスポーツ、そして遊びの関係をめぐる歴史的変遷と総説、またいわゆる「スポーツ格差」など子どもたちのスポーツ環境と実践に係る諸問題を経営・政策の視点より捉えた分析、さらにコロナ禍を生きる子どもたちが直面するスポーツと遊びの「現場」から見えてきた課題と展望について議論が交わされる。

スポーツを享受するうえで子どもたちのスポーツ実践と環境、そして教育をめぐる体制作りと指針の策定はいま不可欠な検討課題といえよう。

[生涯スポーツ-SB-1]遊びの精神から見た子どもの Well-Beingの実現とスポーツ

*松田 恵示¹ (1. 東京学芸大学)

<演者略歴>

大手前女子大学文学部、岡山大学教育学部を経て、東京学芸大学。専門は、スポーツ社会学、遊戯論。体育科教育、教員養成、教育政策の領域においても、実践的な研究を行っている。

スポーツを遊びとして遊ぶことが、子どもたちの Well-Beingの実現には大切なのではないと思う。現在、日本の学習指導要領に大きな影響を与えている“OECD Future of Education and Skills 2030 project”では、Well-Beingの実現こそが、これからの教育の目標であることを強調している。Well-Beingの実現は、いわば変化の激しい社会の中であって、「解のない答え」を自らが他者とともに協働・共創していくもの(ラーニング・コンパスの考え方)でもある。ここで遊びは、それ自体を目的として行う活動である。だからこそ、その活動には「解」などない。しかし、それは一定の創造的な結果をもたらすことが常である。また、遊びないしその精神は「リバーシブル(Reversible)」である。勝つと思うと負けたり、本気と思うと嘘ん気だったり、くるくるとひっくり返る。それは潜在的な「動性」に基礎付けられている。でもだからこそ、面白いし、ここでもまた創造的である。「遊び」を補助線として、Well-Beingの実現に資するスポーツのあり方についていくつかの観点から考えてみたい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／子どもたちの Well-Beingとスポーツー政策・産業・そして遊びー

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第2会場 (3号館4階401教室)

新型コロナウイルスの終息に向けた模索は体育・スポーツ界でも今なお続けられている。このコロナ禍において、昨年の生涯スポーツ部会の本課題グループでは産業界の興隆とスポーツ、さらに身体運動する人間の幸福ー体育・スポーツにおけるWell-Beingーの所在をめぐって討議が行われた。その結果、スポーツ文化の未来を担う子どもたちのスポーツ環境と教育体制、さらにコロナ対策をはじめ子どもたちを取り巻く困難な状況において子どもたちのスポーツ実践をどのように保証し、さらにWell-Beingの実現に向けた指針をいかに定めればよいのかとの問いが立ち現れた。

本シンポジウムでは、昨年度のシンポジウムにて遺された課題を踏まえて子どもたちとスポーツ、そして遊びの関係性をめぐる歴史的変遷と総説、またいわゆる「スポーツ格差」など子どもたちのスポーツ環境と実践に係る諸問題を経営・政策の視点より捉えた分析、さらにコロナ禍を生きる子どもたちが直面するスポーツと遊びの「現場」から見えてきた課題と展望について議論が交わされる。

スポーツを享受するうえでの子どもたちのスポーツ実践と環境、そして教育をめぐる体制作りと指針の策定はいま不可欠な検討課題といえよう。

[生涯スポーツ-SB-2]子どものスポーツにおける格差と Well-Being

研究上の課題を中心に

*宮本 幸子¹ (1. 笹川スポーツ財団)

<演者略歴>

株式会社ベネッセコーポレーション入社後、ベネッセ教育総合研究所、国内教育事業市場リサーチ等を経て、2016年より笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所に所属。「スポーツライフ・データ」、保護者や小学校の調査研究等を担当。

2000年代から注目された「格差論」は子どもの研究において積極的に取り入れられ、今や格差や貧困といった論点は、多くの領域で不可欠のものとなっている。家庭環境がもたらす子どもの不利を社会や政策によって解決するという視点は、子どもの Well-Beingを検討する上でも非常に重要である。

スポーツの研究においては、各領域で SES（Socioeconomic status）を変数として用いた分析はみられるものの、子どもの格差としてまとまった論考は少ない状況が続いていた。そのような中で、清水ら（2021）が『子どものスポーツ格差ー体力二極化の原因を問う』において、社会的属性や子どものスポーツ、体力・運動能力等の変数を網羅的に分析し、格差研究のパラダイム確立に向けて先導的な役割を果たした。とはいえこのような研究は緒についたばかりで、残された課題も多く存在する。

本発表では「スポーツライフ・データ」等、笹川スポーツ財団が実施した子どもの調査研究の結果を紹介するとともに、子どものスポーツにおける格差研究の今後の課題を示し、格差と Well-Beingを考える上での論点を提示して議論につなげたいと考えている。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／子どもたちのWell-Beingとスポーツー政策・産業・そして遊びー

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第2会場 (3号館4階401教室)

新型コロナウイルスの終息に向けた模索は体育・スポーツ界でも今なお続けられている。このコロナ禍において、昨年の生涯スポーツ部会の本課題グループでは産業界の興隆とスポーツ、さらに身体運動する人間の幸福ー体育・スポーツにおけるWell-Beingーの所在をめぐって討議が行われた。その結果、スポーツ文化の未来を担う子どもたちのスポーツ環境と教育体制、さらにコロナ対策をはじめ子どもたちを取り巻く困難な状況において子どもたちのスポーツ実践をどのように保証し、さらにWell-Beingの実現に向けた指針をいかに定めればよいのかとの問いが立ち現れた。

本シンポジウムでは、昨年度のシンポジウムにて遺された課題を踏まえて子どもたちとスポーツ、そして遊びの関係性をめぐる歴史的変遷と総説、またいわゆる「スポーツ格差」など子どもたちのスポーツ環境と実践に係る諸問題を経営・政策の視点より捉えた分析、さらにコロナ禍を生きる子どもたちが直面するスポーツと遊びの「現場」から見えてきた課題と展望について議論が交わされる。

スポーツを享受するうえでの子どもたちのスポーツ実践と環境、そして教育をめぐる体制作りと指針の策定はいま不可欠な検討課題といえよう。

[生涯スポーツ-SB-3]幼児期から発現する身体発達の二極化を防ぐ施策の提案

幼少期の Well-Beingの保障のために

*春日 晃章¹ (1. 岐阜大学)

<演者略歴>

金沢大学大学院教育学研究科修了後、岐阜聖徳学園大学短期大学部を経て、2007年より岐阜大学教育学部に勤務。博士（医学）。専門は発育発達学、測定評価学。学校法人春日学園の理事長も務め、2つの幼稚園と1つの保育園の経営と保育・運動プログラムの開発や検証にも関わっている。

幼少期の子ども達にとってもっとも保障されなければいけないのは生まれながらに持つ動きへの欲求・本能を満たす身体活動時間の確保であり、幼少期の Well-Beingの実現には不可欠である。この時間は単に体を動かすだけでなく、様々な大人や同年代の子ども達と“楽しく関わりながら夢中になって身体活動に勤しむ”ことが、子ども自身の主体的な取り組みに繋げるためにも大切なのだ。しかし、今の我が国の保育施設や小学校では、本当にその時間を確保する必要性和重要性を感じているのか疑問が残る。ケンカ、ケガ、熱中症などを恐れて身体活動の時間が年々縮小されてきてはいないか？単に放し飼いのように遊ばせるのではなく、興味や関心を引き出すような運動遊びのプログラム提供がされているか？さらに、幼児期から身体的発達量の二極化が出現することも確認されており、運動への興味関心や運動有能感の格差も実はこの時期から既に現れ始めている。となると、生涯スポーツを通した Well-Beingの実現のためには幼児期から二極化を防ぎ、全体の底上げの施策が必要となる。今回、発表者が多様な側面から取り組んでいる施策とその効果を合わせて紹介し、幼少児にとっての真の Well-Beingとはについて論究したい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

📅 2022年9月1日(木) 10:30 ~ 12:20 | 📍 第3会場 3号館4階402教室

競技スポーツ研究部会【課題B】 テーマ別シンポジウム／競技スポーツの女性コーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本の女性のスポーツ実施率は、男性よりも低いもののジェンダーバランスが取れていないとまではいえない。このように、我が国のスポーツ実施者の量的なジェンダーバランスは一定程度取れているといえよう。一方、コーチに目を向けると、ジェンダーバランスが取れているとは言い難い状況にある。モデル・コア・カリキュラムが完成し、日本スポーツ協会において新たなコーチ養成講習会がスタートした。しかし、受講生の割合は男性が圧倒的に高い。また、トップカテゴリーのコーチを務める女性コーチは数えるほどしかいないのが現状である。そこで、本シンポジウムでは「競技スポーツの女性コーチ養成」をテーマとして設定し、女性を取り巻く社会的・文化的な背景、現在のコーチ養成のシステム、トップカテゴリーにおける女性コーチの実際について把握したうえで、競技スポーツにおける女性コーチ養成をいかに行い、コーチにおけるジェンダーバランスをいかに取っていくかを議論する。

[競技スポーツ-SB-1] 女性コーチの活躍を支える組織文化をめざして

スポーツにおける女性を取り巻く社会的・文化的な背景

*来田 享子¹ (1. 中京大学)

[競技スポーツ-SB-2] 女性コーチ育成の現状

*三倉 茜¹ (1. 金沢医科大学)

[競技スポーツ-SB-3] 日本代表選手から日本代表監督へ

女子サッカーの例

*高倉 麻子¹ (1. 株式会社Bamboo8)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題B】 テーマ別シンポジウム／競技スポーツの女性コーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第3会場 (3号館4階402教室)

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本の女性のスポーツ実施率は、男性よりも低いもののジェンダーバランスが取れていないとまではいえない。このように、我が国のスポーツ実施者の量的なジェンダーバランスは一定程度取れているといえよう。一方、コーチに目を向けると、ジェンダーバランスが取れているとは言い難い状況にある。モデル・コア・カリキュラムが完成し、日本スポーツ協会において新たなコーチ養成講習会がスタートした。しかし、受講生の割合は男性が圧倒的に高い。また、トップカテゴリーのコーチを務める女性コーチは数えるほどしかないのが現状である。そこで、本シンポジウムでは「競技スポーツの女性コーチ養成」をテーマとして設定し、女性を取り巻く社会的・文化的な背景、現在のコーチ養成のシステム、トップカテゴリーにおける女性コーチの実際について把握したうえで、競技スポーツにおける女性コーチ養成をいかに行い、コーチにおけるジェンダーバランスをいかに取っていくかを議論する。

[競技スポーツ-SB-1]女性コーチの活躍を支える組織文化をめざして

スポーツにおける女性を取り巻く社会的・文化的な背景

*來田 享子¹ (1. 中京大学)

<演者略歴>

専門はオリンピック史、スポーツとジェンダー。博士（体育学）。日本スポーツ・体育・健康学会副会長、日本スポーツとジェンダー学会会長

身体が関わる文化であるスポーツにおいては、医療などの分野と同様に、性差に対する合理的配慮が求められる。また、競技性の高いスポーツにおいては、性別にカテゴリーを分けて競技することが公平性の担保のために必要であると考えられてきた。このような性別二元制が容認されやすい文化の中では、性にもとづくダブルスタンダードが意識されにくく、ジェンダーにもとづく差別や不平等の解消が遅れる傾向がある。これを象徴的に示すのが、スポーツ組織の役員やコーチにおける女性割合の低さである。歴史的には、100年前に設立された女性スポーツ組織がすでに解決を求めている課題である。近年、ビジネスとしてもグローバル化するスポーツにおいては、喫緊の課題とされるようになっている。

この根深い課題を解決するためには、1) スポーツ界全体における無意識のジェンダー・バイアスへの気づき、2) 女性コーチの活躍を阻害しない活動環境を整えるための組織文化・組織のガバナンスの醸成、が不可欠だと考えられる。報告では、国際オリンピック委員会が進めるジェンダー平等戦略等を紹介しながら、女性コーチの活躍を支える組織文化の醸成をめざし、前向きな議論を深めたい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題B】 テーマ別シンポジウム／競技スポーツの女性コーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第3会場 (3号館4階402教室)

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本の女性のスポーツ実施率は、男性よりも低いもののジェンダーバランスが取れていないとまではいえない。このように、我が国のスポーツ実施者の量的なジェンダーバランスは一定程度取れているといえよう。一方、コーチに目を向けると、ジェンダーバランスが取れているとは言い難い状況にある。モデル・コア・カリキュラムが完成し、日本スポーツ協会において新たなコーチ養成講習会がスタートした。しかし、受講生の割合は男性が圧倒的に高い。また、トップカテゴリーのコーチを務める女性コーチは数えるほどしかないのが現状である。そこで、本シンポジウムでは「競技スポーツの女性コーチ養成」をテーマとして設定し、女性を取り巻く社会的・文化的な背景、現在のコーチ養成のシステム、トップカテゴリーにおける女性コーチの実際について把握したうえで、競技スポーツにおける女性コーチ養成をいかに行い、コーチにおけるジェンダーバランスをいかに取っていくかを議論する。

[競技スポーツ-SB-2]女性コーチ育成の現状

*三倉 茜¹ (1. 金沢医科大学)

<演者略歴>

2018-2021：順天堂大学女性スポーツ研究センター RA

2021-現在：金沢医科大学 一般教育機構 体育学助教

日本において、女性コーチが少ないという問題が注目され始めたのはごく最近である。第2期スポーツ基本計画で初めて女性コーチに関する記述がなされ、日本のスポーツ政策として初めて女性コーチ育成が目指された。第3期スポーツ基本計画においても、「スポーツを通じた共生社会の実現」に関する項目の1つとして「スポーツを通じた女性の活躍促進」の内容が引き継がれており、女性コーチが少ない現状に言及がなされている。しかし第2期と同様、施策目標や具体的施策にて女性コーチ育成に関する具体的な記述はなされていない。また、女性コーチに関する国内の研究も限られており、女性コーチが直面する課題についての理解も未だ十分ではない。

そのような中、現在少しずつではあるがスポーツ庁や各競技団体において行われ始めている女性コーチ育成事業を紹介し、それぞれの特徴について考察していく。また、国内外で行われている研究にて明らかになっている女性コーチが直面する課題を参考にしながら、今後日本で行われるべき女性コーチ育成について考えていく。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題B】 テーマ別シンポジウム／競技スポーツの女性コーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第3会場 (3号館4階402教室)

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本の女性のスポーツ実施率は、男性よりも低いもののジェンダーバランスが取れていないとまではいえない。このように、我が国のスポーツ実施者の量的なジェンダーバランスは一定程度取れているといえよう。一方、コーチに目を向けると、ジェンダーバランスが取れているとは言い難い状況にある。モデル・コア・カリキュラムが完成し、日本スポーツ協会において新たなコーチ養成講習会がスタートした。しかし、受講生の割合は男性が圧倒的に高い。また、トップカテゴリーのコーチを務める女性コーチは数えるほどしかないのが現状である。そこで、本シンポジウムでは「競技スポーツの女性コーチ養成」をテーマとして設定し、女性を取り巻く社会的・文化的な背景、現在のコーチ養成のシステム、トップカテゴリーにおける女性コーチの実際について把握したうえで、競技スポーツにおける女性コーチ養成をいかに行い、コーチにおけるジェンダーバランスをいかに取っていくかを議論する。

[競技スポーツ-SB-3]日本代表選手から日本代表監督へ

女子サッカーの例

*高倉 麻子¹ (1. 株式会社Bamboo8)

<演者略歴>

- ・元サッカー日本女子代表選手（第1，2回女子W杯・アトランタ五輪出場）
- ・現サッカー指導者（2014U17W杯優勝・2016U20W杯3位・2016~2021なでしこJapan監督 2019W杯 best 16 東京五輪best 8）

日本の女子サッカーの競技環境は、近年、大きく変化している。2000年に約25000人だった競技人口は2020年に48000人を越えるなど、多くの女性が競技としてサッカーに従事するようになった。また、2020年には女子サッカーのプロリーグであるWEリーグが開幕し、さらなる競技力の向上への貢献が期待されている。これらの顕著な環境変化の一方で、女性コーチは未だ少なく、約80,000人のJFA登録指導者のうち3%程度しかいない。特に、WEリーグや代表チームを指揮するトップレベルの女性コーチは非常に限られている。このような背景において、本シンポジウムでは、自身の選手および指導者としてのキャリアの変遷や日本初の女性代表監督としてチームを指揮するに至った経緯を紹介する。また、女性指導者として活躍し続ける上での課題についても共有する。日本サッカー協会では女性対象の指導者講習会や、Associate-Proライセンスと呼ばれる指導者養成コースを設立するなど、女性コーチを増やすための様々な取り組みを進めている。このような流れに加えて、本講演の内容が、より多くの女子サッカー選手やサッカーを愛する女性が、指導者としてのキャリアにチャレンジしやすい環境作りに役立つことを期待している。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

■ 2022年9月1日(木) 17:00 ~ 18:50 | 第6会場 2号館1階11教室

生涯スポーツ研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点（その2）—国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて—

コーディネーター：上野 耕平（香川大学）

ここでは、「国民すべてのスポーツ権を保障する社会の構築」を掲げ、生涯スポーツ社会を実現するための施策立案や現状施策の課題、そして、適切な環境構築に向けて提言をすることを最終目的とします。あらゆるライフステージにおける運動・スポーツ参加を促進するための施策立案に少しでも役立つものとなれば良いと考えています。なお本企画は3年計画で実施されており、初年度であった昨年度には運動・スポーツ参加の減少が社会問題化している若年世代、現状の政策等では不十分であると思われる中年世代や女性の運動・スポーツ参加の現状と課題についてそれぞれご説明頂きました。今年度はさらに視野を広げ、障がい者、元アスリートの運動・スポーツ参加の現状と課題のほか、対象を限定せず参加者みんなで楽しむ「ゆるスポーツ、ユニバーサルスポーツ」の展開について3名のシンポジストからご紹介頂き、フロアの皆様と国民のスポーツ参加率が少しでも向上するような方策について議論したいと思います。その上で、今後の施策立案やそのために求められるエビデンスの収集につながるような議論を行うことを目指します。

[生涯スポーツ-SC-1] 障がい者のスポーツ参加の現状と問題把握

*太田 澄人¹ (1. 長野県障がい者福祉センターサンアップル)

[生涯スポーツ-SC-2] 元アスリートのスポーツ参加（キャリアサポート）の現状と問題把握

*筒井 香¹ (1. 株式会社BorderLeSS)

[生涯スポーツ-SC-3] みんなのスポーツ参加の現状と問題把握

ニュースポーツ・ユニバーサルスポーツに着目して

*仲野 隆士¹ (1. 仙台大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

生涯スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点（その2）－国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて－

コーディネーター：上野 耕平（香川大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第6会場 (2号館1階11教室)

ここでは、「国民すべてのスポーツ権を保障する社会の構築」を掲げ、生涯スポーツ社会を実現するための施策立案や現状施策の課題、そして、適切な環境構築に向けて提言をすることを最終目的とします。あらゆるライフステージにおける運動・スポーツ参加を促進するための施策立案に少しでも役立つものとなれば良いと考えています。なお本企画は3年計画で実施されており、初年度であった昨年度には運動・スポーツ参加の減少が社会問題化している若年世代、現状の政策等では不十分であると思われる中年世代や女性の運動・スポーツ参加の現状と課題についてそれぞれご説明頂きました。今年度はさらに視野を広げ、障がい者、元アスリートの運動・スポーツ参加の現状と課題のほか、対象を限定せず参加者みんなで楽しむ「ゆるスポーツ、ユニバーサルスポーツ」の展開について3名のシンポジストからご紹介頂き、フロアの皆様と国民のスポーツ参加率が少しでも向上するような方策について議論したいと思います。その上で、今後の施策立案やそのために求められるエビデンスの収集につながるような議論を行うことを目指します。

[生涯スポーツ-SC-1]障がい者のスポーツ参加の現状と問題把握

*太田 澄人¹ (1. 長野県障がい者福祉センターサンアップル)

<演者略歴>

長野県障がい者福祉センタースポーツ課係長。また、日本パラスポーツ協会技術委員会推進部会部会長、日本障がい者体育・スポーツ研究会理事を務める。

障がいのある方のスポーツの指導、指導者の育成を中心に、地域の障がい者スポーツ振興に取り組む。障がいのある方が身近な地域で日常的にスポーツ活動ができる環境づくりを目指し活動を行う。

2011年に「スポーツ基本法」が制定され、国の「スポーツ基本計画」にも障がい者スポーツの振興が具体的に記された。2020東京オリ・パラ大会、そして2022北京冬季オリ・パラ大会が開催されるまでの10年間を見ても、障がい者スポーツ（パラスポーツ）は、多くの国民に身近な存在となってきたと言える。しかし、スポーツを通した「共生社会」という視点から眺めた場合、障がい者が気軽にスポーツに参加できているかと言えば、同じ世代の障がいのない者と比べてその機会は少ないままである。スポーツ振興を進める中で、私たちの身近で障がいのある方の活動の場が増えているかを考えていく必要がある。そこでは①障がいを理解し、専門的に指導を行うスポーツ振興（競技力向上、発掘、リハビリ等）と、②障がい者を含めたスポーツとして地域の活動に障がい者が参加できるスポーツ振興（地域で行われている身近な活動への参加）の両方の振興と連携が必要であると思われる。スポーツを通して、様々な立場・背景・特性を有した人・組織が共に活動をするには大きな価値が認められる。当日は障がいのある方がスポーツ活動に日常的に参加できる環境について議論したい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

生涯スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点（その2）－国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて－

コーディネーター：上野 耕平（香川大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第6会場 (2号館1階11教室)

ここでは、「国民すべてのスポーツ権を保障する社会の構築」を掲げ、生涯スポーツ社会を実現するための施策立案や現状施策の課題、そして、適切な環境構築に向けて提言をすることを最終目的とします。あらゆるライフステージにおける運動・スポーツ参加を促進するための施策立案に少しでも役立つものとなれば良いと考えています。なお本企画は3年計画で実施されており、初年度であった昨年度には運動・スポーツ参加の減少が社会問題化している若年世代、現状の政策等では不十分であると思われる中年世代や女性の運動・スポーツ参加の現状と課題についてそれぞれご説明頂きました。今年度はさらに視野を広げ、障がい者、元アスリートの運動・スポーツ参加の現状と課題のほか、対象を限定せず参加者みんなで楽しむ「ゆるスポーツ、ユニバーサルスポーツ」の展開について3名のシンポジストからご紹介頂き、フロアの皆様と国民のスポーツ参加率が少しでも向上するような方策について議論したいと思います。その上で、今後の施策立案やそのために求められるエビデンスの収集につながるような議論を行うことを目指します。

[生涯スポーツ-SC-2]元アスリートのスポーツ参加（キャリアサポート）の現状と問題把握

*筒井 香¹ (1. 株式会社BorderLeSS)

＜演者略歴＞

（株）BorderLeSS代表取締役社長。スポーツ心理学研究で博士号（学術）取得。スポーツメンタルトレーニング指導士として、ジュニアからトップアスリートの思考と感情の整理・調節をサポート。また、スポーツ庁委託事業「スポーツキャリアサポート推進戦略」のプログラムを受講し、アスリートキャリアアドバイザーとしても活動を行う。

スポーツに幼い頃から触れ、多くの時間をスポーツ活動に投資したであろうトップアスリートは、引退を迎えたのち、いかにスポーツと関わりを持っているのか。引退後、自分自身の専門競技でコーチを目指す、または普及活動を行うといった形で、スポーツに携わり続けるケースもある。しかし、これらは自分自身がスポーツを継続するという生涯スポーツの観点で言えば、必ずしも該当しない。本シンポジウムでは、オリンピックが自身の専門スポーツを引退後も愛好している割合が2割弱と、一般の方に比べて低いという笹川スポーツ財団の調査結果を示し、その要因の仮説として、競技引退したトップアスリートが競技から離れた事例（選手A）を紹介する。選手Aは、日本代表としての活動に誇りを持って競技生活を送ってきた背景があり、引退後は「これまでの競技レベルでなければ自分はやれない」という考えを示した。このようなアスリートを含む生涯スポーツ社会の実現のためには、競技引退時に、自身にとってのスポーツの意義や価値を再定義する必要があると考えられる。これをアスリートのキャリアに関する課題と捉え、当日はフロアの皆様と共に議論を深めたい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

生涯スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点（その2）－国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて－

コーディネーター：上野 耕平（香川大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第6会場 (2号館1階11教室)

ここでは、「国民すべてのスポーツ権を保障する社会の構築」を掲げ、生涯スポーツ社会を実現するための施策立案や現状施策の課題、そして、適切な環境構築に向けて提言をすることを最終目的とします。あらゆるライフステージにおける運動・スポーツ参加を促進するための施策立案に少しでも役立つものとなれば良いと考えています。なお本企画は3年計画で実施されており、初年度であった昨年度には運動・スポーツ参加の減少が社会問題化している若年世代、現状の政策等では不十分であると思われる中年世代や女性の運動・スポーツ参加の現状と課題についてそれぞれご説明頂きました。今年度はさらに視野を広げ、障がい者、元アスリートの運動・スポーツ参加の現状と課題のほか、対象を限定せず参加者みんなで楽しむ「ゆるスポーツ、ユニバーサルスポーツ」の展開について3名のシンポジストからご紹介頂き、フロアの皆様と国民のスポーツ参加率が少しでも向上するような方策について議論したいと思います。その上で、今後の施策立案やそのために求められるエビデンスの収集につながるような議論を行うことを目指します。

[生涯スポーツ-SC-3]みんなのスポーツ参加の現状と問題把握

ニュースポーツ・ユニバーサルスポーツに着目して

*仲野 隆士¹ (1. 仙台大学)

<演者略歴>

仙台大学体育学部体育学科教授。仙台大学体育学科長・副学長を歴任し、現在は日本レクリエーション協会理事、公認指導者養成課程認定校研究連絡会議幹事長、宮城県レクリエーション協会副会長、日本生涯スポーツ学会副会長、仙台市スポーツ推進審議会会長、スペシャルオリンピックス日本調査研究委員などを務める。

本発表では、多くの人々に認識されている「ニュースポーツ」、オリパラ教育の一環として紹介されている「ボッチャ」のような「ユニバーサルスポーツ」、さらには2015年に考案された「ゆるスポーツ」などに着目します。それらは「中心」に据えられる近代スポーツに対する「周辺」を構成するレジャースポーツ的役割を有するスポーツ領域として認識されてきたのではないのでしょうか。しかしながら今日、それらは国民のスポーツへの興味関心を喚起しスポーツ実施率を向上させる一手段としての体験会やイベントの全国的開催、学校体育では児童生徒の体育嫌い・運動離れ現象を軽減すべく学習指導要領が従来の「種目ベース」から「型ベース」への再編に伴うルール変更による軽スポーツやニュースポーツの導入、3.11東日本大震災の復旧・復興期における制限された環境下での心身の健康の保持など、新たな役割を担う時代が到来したと捉えても良いのではないのでしょうか。そこで、それらの全体像の把握として現状や問題点を紹介させていただきます。一連のスポーツは、スポーツ庁による第3期スポーツ基本計画「3つの視点」を支える施策を具現化する可能性があると考えています。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

■ 2022年9月1日(木) 17:00 ~ 18:50 | Ⅲ 第8会場 2号館2階21教室

スポーツ文化研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略(2) —身体文化の伝承・継承を科学する—

コーディネーター：久保田 浩史（東京学芸大学）、尾川 翔大（日本体育大学）

指定討論者：石井 隆憲（日本体育大学）

本シンポジウムは「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の2年目にあたるものである。初年度のシンポジウムの目的は、スポーツの保存と流通にフォーカスして、次年度以降の議論を掘り下げていくための課題や論点を浮かび上がらせることであった。

1年目の議論のなかで、スポーツ文化そのものの保存については、スポーツ実践の継承に可能性を見いだすことができるのではないかという問題提起があった。保存されたスポーツ実践は人びとに共有される実践知になりうるものである。そこで、2年目のシンポジウムのテーマは、スポーツを含んだ身体文化を対象にその伝承・継承に設定した。身体文化の伝承・継承においては、個々人の身体文化が伝承・継承の次元に取り上げられるのかどうか为主题の一つになる。そして、身体文化は、具体的な実践の中に価値があり、それは長い歳月を経て結晶した現場の実践知に支えられている。本シンポジウムは、具体的な実践の場面にフォーカスし、身体文化がいかにして伝承・継承されるのかを検討するものである。

[スポーツ文化-SC-1] バイオメカニクス研究から考える身体文化の伝承・継承

*水村（久埜）真由美¹ (1. お茶の水女子大学)

[スポーツ文化-SC-2] 身体文化としての〈わざ〉の伝承と動感出会い

*中村 剛¹ (1. 筑波大学)

[スポーツ文化-SC-3] 空手の指導実践から考える身体文化の伝承・継承

*清水 由佳¹ (1. 一般社団法人劉衛流龍鳳会)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略(2) 一身体文化の伝承・継承を科学する一

コーディネーター：久保田 浩史（東京学芸大学）、尾川 翔大（日本体育大学）

指定討論者：石井 隆憲（日本体育大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第8会場 (2号館2階21教室)

本シンポジウムは「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の2年目にあたるものである。初年度のシンポジウムの目的は、スポーツの保存と流通にフォーカスして、次年度以降の議論を掘り下げていくための課題や論点を浮かび上がらせることであった。

1年目の議論のなかで、スポーツ文化そのものの保存については、スポーツ実践の継承に可能性を見いだすことができるのではないかと問題提起があった。保存されたスポーツ実践は人びとに共有される実践知になりうるものである。そこで、2年目のシンポジウムのテーマは、スポーツを含んだ身体文化を対象にその伝承・継承に設定した。身体文化の伝承・継承においては、個々人の身体文化が伝承・継承の次元に取り上げられるのかどうか为主题の一つになる。そして、身体文化は、具体的な実践の中に価値があり、それは長い歳月を経て結晶した現場の実践知に支えられている。本シンポジウムは、具体的な実践の場面にフォーカスし、身体文化がいかにして伝承・継承されるのかを検討するものである。

[スポーツ文化-SC-1] バイオメカニクス研究から考える身体文化の伝承・継承

*水村（久埜）真由美¹ (1. お茶の水女子大学)

<演者略歴>

お茶の水女子大学基幹研究院教授。6歳よりバレエ、お茶の水女子大で創作舞踊を学ぶ。1989～91年谷桃子バレエ団所属。東京大学大学院教育学研究科修士（体育学スポーツ科学）博士課程（身体教育学）修了、博士（教育学）取得。東京大学助手、お茶の水女子大学専任講師、助教授、准教授を経て現職。日本ダンス医科学研究会代表理事。

ダンスは、文化に根付いて伝承・継承される身体表現である。バレエのように形式化された舞台芸術であっても、その誕生には文化的背景があり、上演されるダンスは、正に文化財といっても過言ではない。競技スポーツのパフォーマンス向上に、バイオメカニクス研究が貢献する事例は数多く報告されている。近年、同じ研究手法を用いて、身体表現としての様々なダンスを分析する研究は増加している。ダンスを対象とした科学的知見の蓄積は、身体運動としてのダンスの独自性を客観的に理解することに貢献し、ダンスの運動としての魅力を伝えるだけでなく、安全にダンスを楽しむための知見も提供している。一方で、バイオメカニクスに代表される定量的な解析から、芸術としての表現性を客観化することは容易ではない。身体文化の芸術的側面の解明には、今後分析手法の工夫や他領域とのコラボレーションといった展開により、バイオメカニクス研究による身体文化の伝承・継承に資する研究展開が期待される。身体への興味を共通点に、異なる領域の研究者が会する本学会での情報共有から、身体文化を対象とした自然科学的研究の今後の発展的な議論が展開されることを楽しみにしている。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略(2) 一身体文化の伝承・継承を科学する一

コーディネーター：久保田 浩史（東京学芸大学）、尾川 翔大（日本体育大学）

指定討論者：石井 隆憲（日本体育大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第8会場 (2号館2階21教室)

本シンポジウムは「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の2年目にあたるものである。初年度のシンポジウムの目的は、スポーツの保存と流通にフォーカスして、次年度以降の議論を掘り下げていくための課題や論点を浮かび上がらせることであった。

1年目の議論のなかで、スポーツ文化そのものの保存については、スポーツ実践の継承に可能性を見いだすことができるのではないかという問題提起があった。保存されたスポーツ実践は人びとに共有される実践知になりうるものである。そこで、2年目のシンポジウムのテーマは、スポーツを含んだ身体文化を対象にその伝承・継承に設定した。身体文化の伝承・継承においては、個々人の身体文化が伝承・継承の次元に取り上げられるのかどうか为主题の一つになる。そして、身体文化は、具体的な実践の中に価値があり、それは長い歳月を経て結晶した現場の実践知に支えられている。本シンポジウムは、具体的な実践の場面にフォーカスし、身体文化がいかにして伝承・継承されるのかを検討するものである。

[スポーツ文化-SC-2]身体文化としての〈わざ〉の伝承と動感出会い

*中村 剛¹ (1. 筑波大学)

＜演者略歴＞

2006年14月11日～2012年19月30日 埼玉大学教育学部准教授

2012年10月11日～11111現在 筑波大学体育系准教授

シンポジウムでは、スポーツ運動学の立場から「身体文化としての〈わざ〉の伝承と動感出会い」というテーマでお話しする。この〈わざ〉は「歴史的にも、社会的にも、その伝承価値を保有している運動文化財」（金子, 2002, p.403）を意味する。

この運動文化財としての〈わざ〉の伝承は、彫刻や絵画などの有形文化財の継承とはずいぶんと違った様相を呈する。それは〈わざ〉の動感能力（金子, 2005, p.44）が人から人に受け継がれることで成立する。つまり〈わざ〉の受け手が、そうした能力をわが身に発生させられるかどうかを鍵を握る。伝え手がかつて習得した〈わざ〉を受け手に伝えようとしても、相手に動感能力が発生しなければ伝承は不成立に終わる。

こうして〈わざ〉の伝承で中核に据えられるのは、受け手の能力発生ということになる。そしてそこでは、伝え手が受け手の内在的な能力発生の営みに「いかにして出会うことができるのか」ということが前景に立てられることになる。

当日は、伝え手と受け手のあいだに伝承関係系が成立する上で不可欠な〈動感出会い〉についてお話しすることにした。

文献

金子明友（2002）わざの伝承．明和出版．

金子明友（2005）身体知の形成（下）．明和出版．

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略(2) 一身体文化の伝承・継承を科学する一

コーディネーター：久保田 浩史（東京学芸大学）、尾川 翔大（日本体育大学）

指定討論者：石井 隆憲（日本体育大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第8会場 (2号館2階21教室)

本シンポジウムは「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の2年目にあたるものである。初年度のシンポジウムの目的は、スポーツの保存と流通にフォーカスして、次年度以降の議論を掘り下げていくための課題や論点を浮かび上がらせることであった。

1年目の議論のなかで、スポーツ文化そのものの保存については、スポーツ実践の継承に可能性を見いだすことができるのではないかと問題提起があった。保存されたスポーツ実践は人びとに共有される実践知になりうるものである。そこで、2年目のシンポジウムのテーマは、スポーツを含んだ身体文化を対象にその伝承・継承に設定した。身体文化の伝承・継承においては、個々人の身体文化が伝承・継承の次元に取り上げられるのかどうか为主题の一つになる。そして、身体文化は、具体的な実践の中に価値があり、それは長い歳月を経て結晶した現場の実践知に支えられている。本シンポジウムは、具体的な実践の場面にフォーカスし、身体文化がいかにして伝承・継承されるのかを検討するものである。

[スポーツ文化-SC-3]空手の指導実践から考える身体文化の伝承・継承

*清水 由佳¹ (1. 一般社団法人劉衛流龍鳳会)

<演者略歴>

世界空手道選手権大会 団体形の部 優勝2回・準優勝2回

アジア空手道選手権大会 団体形の部 三連覇・アジアオリンピック 団体形の部 優勝

2020東京オリンピック 空手競技 解説

殺すための「武術」から、その修行の過程に価値を見出し、その精神性を解くようになって「武道」へと変貌を遂げた。空手も空手道へ。空手界（特に沖縄）では、「伝統空手は絶滅危惧種」であり、今流行っているのは「スポーツ空手である。」いうことを耳にする。しかし、時代の変化に柔軟に対応し、その時代の人々のニーズに寄り添い、人々の心の拠り所としてあったからこそ、空手道は途絶えず、今なお200年以上存在しているのだと思う私は、「昔は…今は…」と批判し、評論家になっている空手家に愚問を感じるところがある。

「伝統」というものには、必ずそのような問題定義がなされているのであろう。

ただ、無形文化である空手道においては「稽古」が全てであり、血統や組織の大きさや口だけでは「技」は語れない。そして、「終わりなき探究」であるからこそ競技生命に関わらず、生涯空手ができるのであり、その探究（研究）のバトンを次世代に渡し続けることそのものの行為を「伝承・継承」というのではないだろうか。

「歪み」かもしれないが、「進化・成長」なのかもしれない。

生身の人間が行う動作である以上、決して「型」にはめることはできない。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

■ 2022年9月1日(木) 17:00 ~ 18:50 | 第5会場 2号館4階4E教室

学校保健体育研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／子どもの心身機能の現状から考えるこれからの保健体育とその科学的背景

コーディネーター：春日 晃章（岐阜大学）、松田 恵示（東京学芸大学）

我が国の子ども達の体力・運動能力低下、体力の二極化、運動・スポーツ離れが懸念される現状を踏まえ、今以上に子ども達が自ら進んで身体活動に親しみ、仲間と共に関わることは重要である。仲間、時間、空間（三間）の減少に伴って放課後の運動遊びが激減した今、学校体育は非常に貴重な時間である。これまでの体育、保健体育を踏襲してだけでは懸案の課題解決は難しく、多くの研究領域からの英知を結集した体育、保健体育を今一度考えていく必要があるのではないかと考えた。本シンポジウムでは、体育科教育だけでなく、他分野の研究領域やその科学的エビデンスをそれぞれのシンポジストの立場から示して頂き、これからの学校体育について考えていきたい。

[学校保健体育-SC-1] 心身機能とその科学的背景

*工藤 和俊¹ (1. 東京大学大学院総合文化研究科)

[学校保健体育-SC-2] 発育発達学の視点で考えるこれからの保健体育

*野井 真吾¹ (1. 日本体育大学)

[学校保健体育-SC-3] 戦後の体育科の変遷について

*近藤 智靖¹ (1. 日本体育大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／子どもの心身機能の現状から考えるこれからの保健体育とその科学的背景

コーディネーター：春日 晃章（岐阜大学）、松田 恵示（東京学芸大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第5会場 (2号館4階4E教室)

我が国の子ども達の体力・運動能力低下、体力の二極化、運動・スポーツ離れが懸念される現状を踏まえ、今以上に子ども達が自ら進んで身体活動に親しみ、仲間と共に関わることは重要である。仲間、時間、空間（三間）の減少に伴って放課後の運動遊びが激減した今、学校体育は非常に貴重な時間である。これまでの体育、保健体育を踏襲していただくだけでは懸案の課題解決は難しく、多くの研究領域からの英知を結集した体育、保健体育を今一度考えていく必要があるのではないかと考えた。本シンポジウムでは、体育科教育だけでなく、他分野の研究領域やその科学的エビデンスをそれぞれのシンポジストの立場から示して頂き、これらからの学校体育について考えていきたい。

[学校保健体育-SC-1]心身機能とその科学的背景

*工藤 和俊¹ (1. 東京大学大学院総合文化研究科)

<演者略歴>

1998年東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系修了、博士（学術）。1998年東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系助手。2002-2003年米国コネチカット大学知覚と行為の生態学研究センター客員研究員。2011年より東京大学大学院総合文化研究科准教授。

「心（こころ）」は「身体（からだ）」なくして存在しえない。その意味において両者は等価ではなく、心はあくまで身体を前提として存在する。心の働きを身体とは独立した記号処理として扱う古典的認知科学に代わり近年注目されている「身体性認知」（embodied cognition）や、知覚・注意・思考・意思決定・情動を包括的に説明する脳活動の統一理論として提唱されている「自由エネルギー原理」の立場も、身体の運動を認知や思考プロセスそのものとして捉えており、運動と感覚/知覚/認知との一体性が強調されている。また、身体性を基盤として知覚行為の学習・発達・進化をつなぐ「階層的動作構築理論」の立場においても、姿勢や呼吸を整え、からだをほぐし、バランスを保つという基底階層が、より高次の複雑な認知・行為を支えると考えられる。さらに、哲学者のメルロ＝ポンティが「他者の心は…身体化されたものとしてのみ与えられる」と主張したように、社会的認知の基盤も身体に求められる。これらの立場はいずれも知覚行為基盤としての身体的重要性を強調するものであり、ひいては基盤的教育科目としての保健体育の存立を支えるものとなる。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／子どもの心身機能の現状から考えるこれからの保健体育とその科学的背景

コーディネーター：春日 晃章（岐阜大学）、松田 恵示（東京学芸大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第5会場 (2号館4階4E教室)

我が国の子ども達の体力・運動能力低下、体力の二極化、運動・スポーツ離れが懸念される現状を踏まえ、今以上に子ども達が自ら進んで身体活動に親しみ、仲間と共に関わることは重要である。仲間、時間、空間（三間）の減少に伴って放課後の運動遊びが激減した今、学校体育は非常に貴重な時間である。これまでの体育、保健体育を踏襲していくだけでは懸案の課題解決は難しく、多くの研究領域からの英知を結集した体育、保健体育を今一度考えていく必要があるのではないかと考えた。本シンポジウムでは、体育科教育だけでなく、他分野の研究領域やその科学的エビデンスをそれぞれのシンポジストの立場から示して頂き、これらからの学校体育について考えていきたい。

[学校保健体育-SC-2] 発育発達学の視点で考えるこれからの保健体育

*野井 真吾¹ (1. 日本体育大学)

<演者略歴>

日本体育大学大学院博士後期課程修了。博士（体育科学）。東京理科大学理工学部専任講師、埼玉大学教育学部准教授、日本体育大学体育学部准教授を経て現職（日本体育大学体育学部教授）。

Society 5.0構想が提唱されている。また、昨今のコロナ禍では GIGAスクール構想の実現に向けた動きが一気に加速し、子どもの「学び」について再考することを余儀なくされている。さらに、AI、アバター、デジタル教科書等といったコトバを日常的に耳にすることを踏まえると、その議論は喫緊の課題ともいえる。このようなことから、体育科教育学分野では ICTを活用した体育授業のあり方等が模索されている現状がある。もちろん、これからの時代にそのような改革が必要であることは理解できる。しかしながら、ヒトは動物である。動物は「動く物」と書くように、動かなければヒトにも人間にもなれない。また、ヒトは人間でもある。人間は「人の間」と書くように、一人で進化してきたわけではない。家族や仲間とともに共存、協力しながら進化してきた。そのように考えると、ヒトは「動いて動物になり、群れて人間になる」といえる。そしてそのことは、Society 5.0時代、GIGAスクール時代が到来しても同じである。むしろ、そのような社会になればなるほど、動くこと、群れることの重要性を強く自覚しておく必要がある。同時に、保健体育に寄せられる期待はますます大きくなるとも考える。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／子どもの心身機能の現状から考えるこれからの保健体育とその科学的背景

コーディネーター：春日 晃章（岐阜大学）、松田 恵示（東京学芸大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第5会場 (2号館4階4E教室)

我が国の子ども達の体力・運動能力低下、体力の二極化、運動・スポーツ離れが懸念される現状を踏まえ、今以上に子ども達が自ら進んで身体活動に親しみ、仲間と共に関わることは重要である。仲間、時間、空間（三間）の減少に伴って放課後の運動遊びが激減した今、学校体育は非常に貴重な時間である。これまでの体育、保健体育を踏襲していくだけでは懸案の課題解決は難しく、多くの研究領域からの英知を結集した体育、保健体育を今一度考えていく必要があるのではないかと考えた。本シンポジウムでは、体育科教育だけでなく、他分野の研究領域やその科学的エビデンスをそれぞれのシンポジストの立場から示して頂き、これらからの学校体育について考えていきたい。

[学校保健体育-SC-3]戦後の体育科の変遷について

*近藤 智靖¹ (1. 日本体育大学)

<演者略歴>

日本体育大学児童スポーツ教育学部教授、日本スポーツ教育学会理事長。（公財）日本学校体育研究連合会理事。筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻博士課程修了 博士（体育科学）。白鷗大学教育学部准教授を経て現職。専門は体育科教育学、スポーツ教育学。

我が国の学習指導要領は概ね10年に一度の単位で改訂されており、それにあわせて体育科でも重視される内容が変遷している。体育科における指導内容を決定づけていく要因は一つに限らず、児童生徒の実態、教育学やスポーツ科学の学術的発展、国内外の教育やスポーツを巡る動向、さらには政治や行政政策の状況等、多岐に及んでいる。学習指導要領はこうした多様な要因を背景として改訂をしている。一例として、体育科の授業において体力づくりと称して、強度の高い運動を実施していくことの背景には、1964年に開催された東京オリンピックや、同時期に始まったスポーツテスト（現在では、新体力テストと呼ばれる）の影響が見られている。また、現在の体育科では資質・能力の育成に向けて「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」が目指されているが、これは国際的なコンピテンシーベースのカリキュラム論議の影響がある。本発表では、こうした体育科が教科としての指導内容を決定づけていく背景を歴史的にたどり、議論のベースを作る予定である。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

■ 2022年9月1日(木) 17:00～18:50 | Ⅲ 第1会場 3号館3階301教室

健康福祉研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／オンライン化で得られる健康、失う健康

コーディネーター：大槻 毅（流通経済大学）

コロナ禍が始まって約1年半後に実施された昨年度のシンポジウムでは、研究者や職能団体の立場から見た健康づくり運動の現状や課題、教育・指導現場における個々の実践事例を紹介して頂いた。その後、感染状況は刻一刻と変化する一方で、エビデンスの集積は着実に進展している。そこで本年度は、オンライン化をはじめとする新しい生活様式が心身の健康にどのような影響を及ぼしているかを、異なる専門領域の研究者による多様な視点で評価するシンポジウムを企画した。まず、中高年における健康・体力の現状と課題を疫学調査により俯瞰したうえで、オンライン化、ソーシャル・ディスタンス、マスク着用、三密回避等により健康づくり運動の場がどのように変わったのか、それらを運動の実践者・指導者がどのように捉えているか等を紹介して頂く。これらを通じ、新しい生活様式のメリットを活かし、そのデメリットを最小限にして中高年の心身機能低下を予防する方法を考えたい。

[健康福祉-SC-1] 身体活動に対するCovid-19の影響とオンライン運動教室の実現可能性

*甲斐 裕子¹ (1. 公益財団法人明治安田厚生事業団体力医学研究所)

[健康福祉-SC-2] 高齢者のADLを維持することを狙いとする運動方法の模索

*竹島 伸生¹ (1. 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科)

[健康福祉-SC-3] 「体験」と「健康」の捉え方

*久保 正秋¹ (1. スポーツ＆レジャー研究所)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題C】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

健康福祉研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／オンライン化で得られる健康、失う健康

コーディネーター：大槻 毅（流通経済大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第1会場 (3号館3階301教室)

コロナ禍が始まって約1年半後に実施された昨年度のシンポジウムでは、研究者や職能団体の立場から見た健康づくり運動の現状や課題、教育・指導現場における個々の実践事例を紹介して頂いた。その後、感染状況は刻一刻と変化する一方で、エビデンスの集積は着実に進展している。そこで本年度は、オンライン化をはじめとする新しい生活様式が心身の健康にどのような影響を及ぼしているかを、異なる専門領域の研究者による多様な視点で評価するシンポジウムを企画した。まず、中高年における健康・体力の現状と課題を疫学調査により俯瞰したうえで、オンライン化、ソーシャル・ディスタンス、マスク着用、三密回避等により健康づくり運動の場がどのように変わったのか、それらを運動の実践者・指導者がどのように捉えているか等を紹介して頂く。これらを通じ、新しい生活様式のメリットを活かし、そのデメリットを最小限にして中高年の心身機能低下を予防する方法を考えたい。

[健康福祉-SC-1]身体活動に対する Covid-19の影響とオンライン運動教室の実現可能性

*甲斐 裕子¹ (1. 公益財団法人明治安田厚生事業団体力医学研究所)

<演者略歴>

筑波大学大学院体育研究科を修了後、九州大学大学院人間環境学府を修了し、博士（人間環境学）を取得。2004年より体力医学研究所に勤務（2020年より現職）。専門は運動疫学。自治体や企業と協力して、身体活動促進や座りすぎ是正のポピュレーションアプローチについて研究。日本運動疫学会理事、日本健康支援学会理事。

コロナ禍に伴う、外出自粛・運動の場の閉鎖・テレワークの急拡大等により、人々の身体活動量が減少した。特に、高齢者では、社会的交流の低下とともに、フレイルや認知症のリスクが上がったと報告されている。一方で、2021年はスポーツ実施率が過去最高を記録するなど予想外の報告も出てきている。海外では、経済的に豊かな地域に住む住民は、日常生活で減少した身体活動を余暇の活動で補っているが、貧しい地域の住民はそうでないことなどが報告されている。我が国でも、緊急事態宣言後の高齢者の身体活動の回復度合いは、社会的つながりによって違いがあることが明らかになっている。すなわち、コロナ禍に関連した身体活動量の変化には、社会経済状況が関与している可能性があり、健康格差を拡大させてしまう懸念がある。このような状況を打破するために、各地でオンラインを活用した運動の機会の提供が試みられているが、その検証は緒に就いたばかりといえる。本シンポジウムでは、最初にコロナ禍に伴う身体活動・運動・スポーツの変化について整理し、その後、我々が行っているオンライン運動教室の実践研究について紹介する。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題C】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

健康福祉研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／オンライン化で得られる健康、失う健康

コーディネーター：大槻 毅（流通経済大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第1会場 (3号館3階301教室)

コロナ禍が始まって約1年半後に実施された昨年度のシンポジウムでは、研究者や職能団体の立場から見た健康づくり運動の現状や課題、教育・指導現場における個々の実践事例を紹介して頂いた。その後、感染状況は刻一刻と変化する一方で、エビデンスの集積は着実に進展している。そこで本年度は、オンライン化をはじめとする新しい生活様式が心身の健康にどのような影響を及ぼしているかを、異なる専門領域の研究者による多様な視点で評価するシンポジウムを企画した。まず、中高年における健康・体力の現状と課題を疫学調査により俯瞰したうえで、オンライン化、ソーシャル・ディスタンシング、マスク着用、三密回避等により健康づくり運動の場がどのように変わったのか、それらを運動の実践者・指導者がどのように捉えているか等を紹介して頂く。これらを通じ、新しい生活様式のメリットを活かし、そのデメリットを最小限にして中高年の心身機能低下を予防する方法を考えたい。

[健康福祉-SC-2]高齢者の ADLを維持することを狙いとする運動方法の模索

*竹島 伸生¹ (1. 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科)

＜演者略歴＞

1955年福岡県生まれ。中京大院修士修了、医学博士（愛知医大）。名古屋市大、鹿屋体大教授を経て2017年より現職。1989年日本体力医学会学会賞受賞; 2020年運動器の健康・日本協会運動器の健康・日本賞 奨励賞受賞、著書：ウエルビクスの勧め（ナッパ）」論文 ほか。

動かない生活は、人の生理的脆弱性を来しやすく、我々の調査からは介護老人福祉施設で動かない生活を継続している高齢者における著しい進行性の筋量低下が示された。人は動くことが大切であり、ADLの維持が期待できる。しかし、虚弱になれば動くことを嫌う高齢者も少なくない。このため動機付けや理解を深める丁寧な情報の提示が改めて必要といえる。演者らは2000年から実施してきた地域公民館を拠点とする地域型運動、または家庭型運動との併用は現在でも継続されている。移動が容易な場所に集い、一緒に運動を行う方法は、内発的動機付けをもたらすための方法として効果的である。一方、コロナ感染で「集まる」という方法が選択できずに中止を已む無くとの声が聞かれていた。家庭型（個人）のみやネット配信を使った運動方法も散見されているが、単なる運動紹介では継続が困難というケースも聞く。今日高齢者に対する運動方法のあり方を改めて考える必要があり、その上で指導者の育成が急務といえる。また高齢人口の増加に伴い、自立度の評価を迅速、かつ簡単にできることが介護予防に必要と考えるが、現在取り組む赤外線深度センサーを使った自立度評価の試みも紹介したい。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題C】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

健康福祉研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／オンライン化で得られる健康、失う健康

コーディネーター：大槻 毅（流通経済大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第1会場 (3号館3階301教室)

コロナ禍が始まって約1年半後に実施された昨年度のシンポジウムでは、研究者や職能団体の立場から見た健康づくり運動の現状や課題、教育・指導現場における個々の実践事例を紹介して頂いた。その後、感染状況は刻一刻と変化する一方で、エビデンスの集積は着実に進展している。そこで本年度は、オンライン化をはじめとする新しい生活様式が心身の健康にどのような影響を及ぼしているかを、異なる専門領域の研究者による多様な視点で評価するシンポジウムを企画した。まず、中高年における健康・体力の現状と課題を疫学調査により俯瞰したうえで、オンライン化、ソーシャル・ディスタンス、マスク着用、三密回避等により健康づくり運動の場がどのように変わったのか、それらを運動の実践者・指導者がどのように捉えているか等を紹介して頂く。これらを通じ、新しい生活様式のメリットを活かし、そのデメリットを最小限にして中高年の心身機能低下を予防する方法を考えたい。

[健康福祉-SC-3] 「体験」と「健康」の捉え方

*久保 正秋¹ (1. スポーツ&レジャー研究所)

<演者略歴>

東京教育大学体育学部卒業 博士（体育科学）筑波大学

日本スポーツ教育学会賞（1995）東海大学名誉教授（2016）日本体育学会賞（2019）

著書：「コーチング論序説」（不昧堂）「体育・スポーツの哲学的見方」（東海大学出版）

本シンポジウムでは、体育哲学の立場から「体験」の「健康」への影響を論じる。しかし「体験」と「健康」、この言葉自体が曖昧である。「体験」は「経験」との相違が不明確であり、混乱した使用法が見られる。例えば「peak experience」の日本語訳には「至高体験」「至高経験」の二つがあり混乱している。「健康」は「病気でないこと」と思われがちだがそうではない。WHOでは身体的、精神的、社会的「well-being」を「健康」としているが「well-being」が何であるかは明確でない。よってまず、「体験」「健康」という言葉を整理する。「体験」を「経験」へと推移する現象として捉え、その始まりである主客未分、脱自、思考以前の状態を「体験」の原点と考えてみる。次に身体的、精神的、社会的「well-being」が何であるのかを考え、「健康」を規定する。そして「well（満足/十分/適切）」な「being（存在/実存/人生）」と「体験」の原点との結びつきを考察し、そこに生起する「体験」の「健康」への影響を見ようとする。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

■ 2022年9月1日(木) 17:00 ~ 18:50 | 第3会場 3号館4階402教室

競技スポーツ研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツにおける性差に応じたトレーニング

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）

オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）において、アスリートの個々の特性に応じたトレーニングを行うことが求められる。中でも、生物学的な性差に応じたトレーニングが重要であるが、その科学的知見や効果的なトレーニング方法などは、まだまだ競技スポーツ現場に落とし込まれていない。研究者、指導者、研究者と指導者の二足の草鞋を履く方など、様々な立場の方をお招きし、性差に応じたトレーニングあり方について考えるシンポジウムとしたい。

[競技スポーツ-SC-1] 月経周期が運動時生理反応に与える影響

*須永 美歌子¹ (1. 日本体育大学)

[競技スポーツ-SC-2] トップアスリートにおける性別特性が障害やパフォーマンスに及ぼす影響

*牧野 講平¹ (1. 森永製菓 in トレーニングラボ)

[競技スポーツ-SC-3] 女性アスリートにおけるトレーニングのマネジメントの実際

*川上 優子¹ (1. キャノンアスリートクラブ九州)

[競技スポーツ-SC-4] 性差を踏まえたジャンプトレーニング

*熊野 陽人¹ (1. 関西福祉大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツにおける性差に応じたトレーニング

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第3会場 (3号館4階402教室)

オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）において、アスリートの個々の特性に応じたトレーニングを行うことが求められる。中でも、生物学的な性差に応じたトレーニングが重要であるが、その科学的知見や効果的なトレーニング方法などは、まだまだ競技スポーツ現場に落とし込まれていない。研究者、指導者、研究者と指導者の二足の草鞋を履く方など、様々な立場の方をお招きし、性差に応じたトレーニングあり方について考えるシンポジウムとしたい。

[競技スポーツ-SC-1] 月経周期が運動時生理反応に与える影響

*須永 美歌子¹ (1. 日本体育大学)

<演者略歴>

日本体育大学児童スポーツ教育学部 教授，博士（医学）

日本オリンピック委員会医・科学スタッフ（陸上競技）

日本陸上競技連盟科学委員

近年、日本人女性アスリートの競技力は急激に向上し、競技スポーツを行う女性の数も増加している。その一方で、女性特有の課題も明らかになってきており、解決が望まれている。その課題のひとつとして、スポーツ現場におけるトレーニングやコンディショニングは、男性を対象としたエビデンスをもとに構築された方法を用いて実施されていることが挙げられる。女性アスリートが健康を維持しながら、効率的にトレーニング効果を獲得し、ピークパフォーマンスの発揮へとつなげるためには、女性の身体的特性を考慮したうえでスポーツ指導を行うことが重要である。

女性は、思春期を迎えると月経周期を有し、性ホルモン濃度（エストロゲン、プロゲステロン）に周期的な変動が生じる。性ホルモンの受容体は乳腺や卵巣のみならず、骨格筋細胞にも存在することから、筋タンパク合成やエネルギー代謝の調節に関与する。本セッションでは、月経周期に伴う性ホルモン濃度の変化が運動時生理反応に与える影響に関する研究を紹介し、生物学的な性差を活かしたトレーニングプログラム開発の可能性について考えたい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツにおける性差に応じたトレーニング

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第3会場 (3号館4階402教室)

オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）において、アスリートの個々の特性に応じたトレーニングを行うことが求められる。中でも、生物学的な性差に応じたトレーニングが重要であるが、その科学的知見や効果的なトレーニング方法などは、まだまだ競技スポーツ現場に落とし込まれていない。研究者、指導者、研究者と指導者の二足の草鞋を履く方など、様々な立場の方をお招きし、性差に応じたトレーニングあり方について考えるシンポジウムとしたい。

[競技スポーツ-SC-2] トップアスリートにおける性別特性が障害やパフォーマンスに及ぼす影響

*牧野 講平¹ (1. 森永製菓 in トレーニングラボ)

<演者略歴>

2003年に森永製菓inトレーニングラボと契約し、これまでに、浅田真央選手（フィギュアスケート）、有村智恵選手（ゴルフ）、前田健太選手（MLB）、高梨沙羅選手（スキージャンプ）、宮里美香選手（ゴルフ）、太田雄貴選手（フェンシング）、小川泰弘選手（プロ野球）、高藤直寿選手（柔道）など様々なトップアスリートをサポート。

男女問わずさまざまな競技のトップアスリートをサポートしてきたが、トップレベルの選手であっても例外なく、男女それぞれに骨格的特徴や生理的特性があり、それらが障害や競技パフォーマンスに影響を与えている。今回は、それらの特徴を選手の実例と共にご紹介する。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツにおける性差に応じたトレーニング

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第3会場 (3号館4階402教室)

オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）において、アスリートの個々の特性に応じたトレーニングを行うことが求められる。中でも、生物学的な性差に応じたトレーニングが重要であるが、その科学的知見や効果的なトレーニング方法などは、まだまだ競技スポーツ現場に落とし込まれていない。研究者、指導者、研究者と指導者の二足の草鞋を履く方など、様々な立場の方をお招きし、性差に応じたトレーニングあり方について考えるシンポジウムとしたい。

[競技スポーツ-SC-3]女性アスリートにおけるトレーニングのマネジメント の実際

*川上 優子¹ (1. キャノンアスリートクラブ九州)

<演者略歴>

キャノンアスリートクラブ九州 監督。一般社団法人スポーツコア 代表理事。

1996年アトランタオリンピック女子10,000m7位入賞、2000年シドニーオリンピック女子10,000m10位と2大会連続でオリンピック出場。

女性アスリートには男性アスリートと比較して、様々な特徴や課題があることは明らかとなっているが、実際にどのようにしてトレーニングを計画し実施するのか、どのように月経周期の変化に対応するのかなど、リアルなトレーニングのマネジメント方法論に関しての知見は不足している。

自身が陸上競技・長距離種目のトップアスリートとして活躍した際の経験や、現在は指導者として女子駅伝チームの指導を行っているため、そこでの工夫や実践内容などを紹介する。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツにおける性差に応じたトレーニング

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第3会場 (3号館4階402教室)

オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）において、アスリートの個々の特性に応じたトレーニングを行うことが求められる。中でも、生物学的な性差に応じたトレーニングが重要であるが、その科学的知見や効果的なトレーニング方法などは、まだまだ競技スポーツ現場に落とし込まれていない。研究者、指導者、研究者と指導者の二足の草鞋を履く方など、様々な立場の方をお招きし、性差に応じたトレーニングあり方について考えるシンポジウムとしたい。

[競技スポーツ-SC-4]性差を踏まえたジャンプトレーニング

*熊野 陽人¹ (1. 関西福祉大学)

<演者略歴>

博士（体育学）、関西福祉大学社会福祉学部 准教授、同大学陸上競技部 監督、JSPO-CD

日本陸上競技連盟強化委員会 女子走幅跳オリンピック強化スタッフ（2016.12～2021.9）

専門領域はコーチング学。専門種目は陸上競技・跳躍種目、様々なスポーツ種目のジャンプコーチを務める。

様々なスポーツ種目において欠かすことのできない動作のひとつが、ジャンプ（跳ぶ）である。その目的は「高く跳ぶ」「遠くに跳ぶ」「速く跳ぶ」などであり、極めて短い接地時間で下肢が爆発的に力を発揮することが求められる。このジャンプ動作には生物学的な性差が大きな影響を与え、トレーニングアプローチは男女で異なるものとなる。本セッションでは、ジャンプ動作影響を与える性差に関するエビデンスを紹介し、男女それぞれどのようなトレーニングが必要なのか、どのような流れでトレーニングを行うべきなのか、演者の実践経験を交えながら論じていきたい。